



靖國神社境内の満開の桜標本木と能楽堂



第135号

公益財団法人 特攻隊戦没者  
慰霊顕彰会

編集人 金子敬志  
 発行人 石井光政  
 印刷所 島根印刷株式会社

目次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 副理事長 岩崎 茂

各地慰霊祭参加報告

第42回特攻隊全戦没者慰霊祭・・・・・・・・・・・・・ 編集長 金子敬志

宮崎県特攻隊慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 副理事長 岩崎 茂

会員等投稿

特別寄稿 孫への証言、私の戦場体験記・・・・・・・・・・・・・ 会員 多田野弘

桶川飛行学校平和祈念館と父伍井芳夫中佐・・・・・・・・・・・・・ 理事 白田智子

築城基地開設五十年史より(其の二)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 水町勝博

(其の二)

海上挺進第20戦隊及び基地第20大隊・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 中溝二郎

海 没・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 元会員 松尾 弘

海上挺進第21戦隊及び基地第21大隊・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 中溝二郎

海上挺進第22戦隊及び基地第22大隊・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 中溝二郎

海上挺進第23戦隊及び基地第23大隊・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 中溝二郎

海上挺進第24戦隊及び基地第24大隊・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 中溝二郎

海上挺進第24戦隊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 元隊員 給田善之助

海上挺進第24戦隊略史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 元隊員 村田 圭

海上挺進第25戦隊及び基地第25大隊・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 中溝二郎

思い出の記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 元隊員 佐藤 瑞

顕彰譜(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 池田康博

連載 山ある記14・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 池田康博

芸欄 歌俳柳の広場

短歌・俳句・川柳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 池田康博

事務局からの報告等

令和2年度事業報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

寄付者等の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

挿絵提供 空自OB 宇山氏 会員 荒木氏

## 「巻頭言」

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

副理事長

岩崎 茂



特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以下「特攻顕彰会」）の機関紙「特攻」をご愛読されている皆様、こんにちは。日ごろから私達、「特攻顕彰会」に対し頂いておられます皆様方からのご支援・ご協力、そしてご理解に心から感謝・御礼申し上げます。

我が国では、昨年の1月下旬から新型コロナウイルス（WHOの命名…Covid-19）が残念ながら報道のトップ記事となり、以降もその状態が続いている。我が国では、国内でのCovid-19の感染者が確認された以降、感染拡大防止の為、国外からの入国制限等、各種の対

策が取られてきている。しかし、感染者の拡大は止まらず、結果的には、戦後は経験した事がない様な、全国レベルでの学校閉鎖や緊急事態宣言が行われる事態となった。そして、このCovid-19の被害は全世界に拡大し、所謂、パンデミック状態となつてしまつており、被害は拡大の一途である。既に世界での感染者数は1億3千万人となり、お亡くなりになられた方は3百万人に近づいている。世界的な感染拡大を考慮し、多くの日本国民の悲願であつた東京オリンピック・パラリンピックは1年間延期されることとなり、極めて異例の事態となつている。Covid-19私達の生活様式を根本から覆すことになつた。国民の多くの方々、がステイ・ホームやリモート・ワーク等、通勤を局限し、外出等を控えざるを得ない状態になり、この影響は、私達、「特攻顕彰会」にも大きく影響することになつた。各地での慰霊行事は軒並み中止や規模縮小となつた。昨年は、我々「特攻顕彰会」として、当初計画では全国44ヶ所の慰霊祭に参加予定であつたものの、結果的には10ヶ所のみ参加となつた。参加できなかったところには玉串料や供花を奉納させて頂いた。

その後、このCovid-19への各種

感染拡大防止策が功を奏し、新規感染者数が急激に低減したことから、緊急事態宣言は、5月下旬には全国で解除された。その後、暫くの間は落ち着いていたものの、10月末から再度、新規感染者数が急速に拡大傾向となり、残念ながら、本年1月、限られた地域ではあつたものの再度の緊急事態宣言が行われた。本年も各地での特攻隊員に対する慰霊行事は、昨年同様に規模縮小や中止との判断がなされてきている状態である。大変残念な事態である。しかし、行動等の自粛以外に感染予防の有効な手段も無く、新規感染者数を抑える為には仕方ない判断である。

この様な中、3月25日予定どおり、東京オリンピック・パラリンピックの為に聖火リレーが福島県からスタートした。暗闇の中になにか光を見たような感じである。この東京オリンピック・パラリンピックの開催には賛否両論がある事は承知している。しかし、この聖火は多くの国民に希望の光を届けている事も事実である。今後、この聖火が無事に全国を走破し、東京に燈が灯る事を願っている。今年の靖国神社での特攻隊員の慰霊行事は、参加者をごくわずかに絞り、3月27日に執り行われた。晴天に恵まれ、桜も

丁度、満開であったことから、比較的多くの参拝客が靖国神社に來られていた中の行事であった。私達の慰靈行事が終わり、参加者一同(20名程度)が靖国神社内の遊就館の入り口付近に建立されている「特攻勇士之像」へ向け移動している時に、ある光景を目にした。靖国神社に花見を兼ねて(?)参拝に來られたと思われる方々が、我が「特攻勇士之像」の前で説明文を読み、手を合わせてくれた。何組かの比較的若い方々であった。多分、「特攻顕彰会」の会員ではない方々の様でしたが、「特攻勇士之像」に参拝してくれていたのである。しかし、私達が黒い服装で「特攻勇士之像」に近づいて行ったので、この方達は早々に立ち去って行ってしまった。追い払ってしまったような感じになってしまった。大変申し訳ない事をしてしまった。少し待つべきだったかもしれない。しかし、この光景を見て、何かホッコリとした気持ちになるとともに勇気を頂いた。

行っているもの、会員数の減少に歯止めがかかっていない。でも、先ほど述べたように、我々の努力不足で、我々の思いが十分にいろいろな方々に伝わっていないところもある。我々は、いろいろな情報発信機能を持っているし、使うことが出来る筈である。これらの機能を駆使し、私達の思いや活動をいろいろな人達に届け、先ほどの方々とともに、先人たちの思いを語り継いで、先人たちの残した偉業を後世に語り継ぐ事を皆で一緒になつてやらなければと再度、認識させられた。

今年、大東亜戦争開始から80年目、最初の特別攻撃隊がマバラカット基地から飛び上がった時から77年目である。我々が現在、享受している平和で安定した生活は、特攻勇士の方々のご努力の上に成り立っている事を認識しつつ「特攻顕彰会」の各種事業に邁進する所存です。

「特攻顕彰会」の会員の方々には、会員募集にもご理解を頂き、多くの方々に対しますお声掛けと会へのお誘いをお願いし、合わせてCovid-19が一日でも早く鎮まる事を願いつつ令和三年五月号の挨拶といたします。



## 第42回特攻隊全戦没者慰霊祭

編集長 金子 敬志

令和3年3月27日(土)に靖国神社において斎行する予定であった第42回特攻隊全戦没者慰霊祭は、引き続き新型コロナウイルスの影響により、参集者の安全を考慮し、昨年同様、顕彰会役員等による代表参拝に変更して斎行されました。

慰霊祭行事は次のとおりです。

## 一 玉串料の伝達

「第42回特攻隊全戦没者慰霊祭参列予定者一同」として藤田理事長より村田権宮司へ伝達(玉串料を奉納された方の御芳名を添付しました。)

## 二 式次第

- (1) 修祓
- (2) 祭文奏上(理事長)
- (3) 玉串奉奠
- (4) 退下

式開始に先立って参集殿控え室において会員の皆様からの玉串料を靖国神社村田権山口宮司にお渡ししました。

この後例年は拝殿に向いますが、今年は拝殿が改修工事中のため仮拝殿に於いて修祓を受けました。その後、本殿に昇殿し、理事長の祭文奏上、代表による玉串奉奠を行い哀悼の誠をご英霊に捧げました。

終了後、参加者は遊就館前の特攻勇士之像に手を合わせた後、記念撮影をして

解散しました。

## 祭文

謹んで在天の英霊に申し上げます。

皆様が祖国日本のために尊い命をささげられた大東亜戦争の開戦から今年で早くも80年が過ぎました。この間皆様のご加護により、日本は戦禍に見舞われることなく、平和な時代を過ごしてまいりました。

現状を観るに、昨年、中国から拡散した新型コロナウイルスが全世界に蔓延し、パンデミックが発生しております。我が日本でも、ここ1年で、50万に近い方がり患し、約9千名の方が命を失いました。

このため、昨年のここ靖国神社での慰霊祭も、本日の慰霊祭も、規模を縮小して行わざるを得ない状況になってしまいました。誠に申し訳なく思う次第です。

この戦後76年間のことを振り返ってみますと、科学、経済等の発展は、ありました。しかし、我が国の平穩の陰で、世界においては、様々な戦争や、紛争、テロ等が、生起してきております。

先の大戦後、人類は、その教訓に鑑み、国際連合等の国際機関、相互安全保障同盟の締結核兵器の管理条約等を通じて、平和構築の努力を続けて参りました。

その御蔭で、世界大戦規模の混乱は、防

止できてきました。しかしながら、主義・

思想や宗教戦争等、新しい形での争い事、また、テロ等民族、地域間の紛争が、頻発するようになって来ております。その争う空間も、従来の陸海空に加えて、宇宙、サイバー、電磁波空間に広がり、ロボット等無人兵器間での争いに移行してきています。

一般的に観ても、「空間的」には、宇宙、サイバー、また、「物理的手段」には、核兵器、生物化学兵器、無人兵器等による争い事に広がり、国際的な管理面でも、それらへの取り組みが遅れております。

新しい問題の生起が、危惧されているところであります。

私達人類は、生き物としての原点を忘れること無く、これを直視し、ひるむこと無く、平和平穩の世界を求めて、前進していく必要があると、考えます。

身近な問題として、昨年行われるはずだった、日本で戦後2回目のオリンピックも今年に延期となりました。無事に開催され、日本の底力を世界に示すことが出来るよう、是非、皆様にもお力添えを賜りますようお願い申し上げます。戦後、自虐史観にとらわれ、日本のすべてを批判し、それがあたかも正義であるかのような風潮が蔓延しています。「今の若い者でこれからの日本は大丈夫か」と言う



(5) 第135号

年寄りも多いですが、スポーツを見ていて、若い選手が日本を代表し、日の丸を掲げ、大きな声で君が代を歌う姿を見ると、今の若者にも、意識の根底には日本を想う気持ちがあると感じます。また、コロナの感染防止に対しても、他国にみられるような、強権的な手法を取らなくとも、自主的に予防処置を講じ、利他の精神で対処することで、他国よりも感染者は大幅に低く抑えられています。皆様が身を以て示された日本人の精神は、脈々と受け継がれ、日本の将来は明るいのだと思えてきます。

皆様は、祖国日本の不滅と最後の勝利を確信し、より良い日本を建設すべく、国家国民のために一身を捧げられました。皆様の示されたこの精神こそ、常に国を護り、国を興す底力であり、身を以て範を示されたものと信じてやみません。

私たちは、これからもご英霊の皆様の志を守り、粉骨砕身、ますます努力し、日本の発展と文化の継承に努める所存です。どうか在天の英霊、安らかに鎮まりますとともに、私共に一層のお力を賜らんことをこいねがう次第です。

令和3年3月27日

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 藤田幸生



仮拝殿における修祓



理事長から村田権宮司へ玉串伝達



参列者の集合写真



特攻像勇士之像に参拝

この度、第42回特攻隊全戦没者  
慰霊祭の開催にあたり、会の皆様方  
のご尽力に敬意を表します。

国家に殉じた英霊が安らかに眠られ  
ますことを、お祈り申し上げます。

小職も常に特攻隊全戦没者に想いを  
馳せ、日々の公務に当たって参ります。

合掌



“ヒゲの隊長”こと  
参議院議員

佐藤 まさひさ

第四十二回特攻隊全戦没者慰霊祭の御  
斎行にあたり、英霊の崇高な御遺徳を偲び、  
謹んで哀悼の誠を捧げます。

祖国の平和を守らんがため、若くしてそ  
の身命を捧げた英霊への崇敬と感謝の念  
を深く心に刻み、戦後失われた我が国の誇  
りを取り戻すべく、粉骨碎身努めて参りま  
すことを改めてお誓い申し上げます。

御英霊の安らかならんことと、本日御参  
集の皆様御健勝と御多幸を心より祈念  
致します。

令和三年 三月二十七日

参議院議員  
元自衛官

宇都隆史



宮崎縣護國神社での「特攻勇士之像」前  
での慰靈祭

副理事長 岩崎 茂

まだまだコロナ禍が収まらない3月28日に宮崎縣護國神社に奉納された「特攻勇士之像」前での特攻隊員を偲び慰靈祭（以降「宮崎県特攻隊慰靈祭」）が執り行われた。

私達、「特攻隊戦没者慰靈顕彰会」（以降、「特攻慰靈顕彰会」）は日本各地の護國神社に「特攻勇士之像」の寄贈を決定し、平成19年（2007年）4月の鹿児島縣護國神社を皮切りに、これまでに19体の「特攻勇士之像」を奉納してきている。この宮崎縣護國神社に「特攻勇士之像」が奉納されたのが、平成31年3月28日（2019年）であった。現在の第126代徳仁天皇が即位される直前であった。今年の3月で二年経過したことになる。この「特攻勇士之像」を宮崎縣護國神社に奉納した時に、今後の「宮崎県特攻隊慰靈祭」は、この日に因み3月28日とすることが決められ、今年も同日に行われた。私は、この為、靖國神社での慰靈祭終了後、羽田に直行し、「宮崎県特攻隊慰靈祭」に臨んだ。宮崎空港に到着した際には、晴天に恵まれ、関東に

比較し、かなり暖かく、上着では寧ろ暑いくらいであった。ところが、夕刻以降、雲が多くなり、翌日は早朝からかなりの土砂降りであった。しかし、慰靈祭の間が近づくに従い、徐々に雨が小降りとなり、慰靈祭の開始時には、完全に雨が上がり、次第に暖かくなってきていた。しかし、昨夜からの雨で、「特攻勇士之像」前の地盤が若干ゆるんでいたこともあり、今回は、宮崎縣護國神社本部雅裕宮司のご配慮で、護國神社の神殿内で執り行われた。残念ながらコロナ禍でもあり、参加者を規制しており、現役自衛官等は参加していません。慰靈行事の三浦委員長を初めとして、宮崎県選出の国会議員の方々、県議会議員、宮崎縣護國神社関係者等が集い、慰靈行事を行うことが出来た。我が「特攻勇士之像」は、永峰肇・海軍飛行兵曹長の慰靈碑の横に奉納されている。永峰

兵曹長は、神風特別攻撃隊敷島隊（最初の特攻隊）昭和19年10月25日フィリピン・マバラカット西飛行場からの出撃）の四番機としての出撃であった。享年19歳である。慰靈碑には、「南溟にたとへこの身が果つるともいくとせ後の春を想えば」との遺詠が刻まれている。当にこの春の事か？ 宮崎県では陸軍・海軍の総計70名が特攻で命を捧げられた。ここに御英霊に対し哀悼の誠を捧げますと、謹んでご冥福をご祈念申し上げます。



宮崎縣護國神社境内の「特攻勇士之像」

## 特別寄稿 会報編集部

昭和19年10月25日、フイリピンマバラカット飛行場から飛び立った、最初の特別攻撃隊を見送った、ゼロ戦整備員の多田野弘氏。

御年100歳になられた多田野氏は、昭和14年に志願して海軍に入隊、その後航空機整備員として多くの戦場で苛烈な戦争体験をされました。

この度、氏より、その体験を綴った「孫への証言、私の戦場体験記」を、氏の了解を得て掲載させていただきます。

## 孫への証言、私の戦場体験記

多田野 弘

私の戦場の体験は、昭和18年7月、南太平洋の激戦地ラバウルから始まっている。23歳だった。連日、100機を超える戦爆連合の敵機の来襲を迎えて、200機余いた我が戦闘機隊が迎撃撃退していた。私はゼロ戦の整備下士官として勇躍戦闘に従事していた。来襲のあるたびに、滑走路の傍に設けた土盛りの防空壕に退避したが、B24爆撃機が投下する1トン爆弾には効果が無く犠牲者が出た。やがて、我が方は人員・機材共に損傷していったが、米軍は日増しに戦力を増強し、戦況は次第に悪化していった。このままでは死を迎える時が近いと、一兵士である私にも感じられた。

夜が来るたび、どんな死に方をすべきかを考えるようになった。ある夜、心の奥から「びくびくせずには死ね」という声が聞こえてきた。そうだ！祖国や家族の平和のために一命を捨てることは、男子の本懐ではないか、前から撃たれて死のう、とあっさり死を覚悟することができた。すると忽ち、死への恐れは消え去り、心は青天のように晴れわたったり、勇気が湧いてきたのを覚えている。

昭和19年1月、彼我の戦力の差が大きくなり、戦線の縮小を余儀なくされ、我が戦闘機隊は全員サイパンに移動することになった。その内私たち250名余は、二隻の貨物船に便乗して行くことになっていた。当時ラバウルは、すでに空も海も米軍の勢力下に移っており、出港した船が無事に着いたためしがないほど緊迫していた。

さあ困った、船が沈めばどうやって死ねばよいだろうかと思索する中、ふとある考えが閃いた。水中を深く潜っていくと、水圧で失神して死ぬることを思いついた。苦しまずに死ぬる方法を思いついた私は泥のように眠ってしまった。

案の定、出港の翌日コンソリー爆撃機が一機飛来して爆弾投下され、僚船羽黒丸が直撃で船先を上にして目の前で沈んでいったが、我が海河丸は幸運にも至近弾であった。しかし、安心したのは束の間、翌日、我が船が魚雷を受け、私は轟音と共に吹き飛ばされた。だがどこも傷ついていなかった。機関が無事だったのか船は進んでいたが、二発目が来るのは必至とみて、何も考えずデッキから海に飛び込んだ。太平洋の波は巨大だったが、死ぬのは未だ早すぎると悠々と浮かんでいた。何時の間に来たのか、味方の駆逐艦に救助され、潜る必要はなくサイパンに着いた。両日の戦死者は35名であった。

サイパンでは、忘れもしない昭和19年2月19日、米58機動部隊によつて壊滅されたトラック島へ進出の命を受けた。私は数名の部下と1式陸攻(双発爆撃機)に便乗し、ゼロ戦20数機と共に向かった。1式陸攻は速力が遅く、弾が当たるとすぐ燃えるので1式ライターと呼ばれていた。トラック島に着く前に、グラマン戦闘機に食われてしまうだろうと思ひ、いい死に場所を与えられたと勇んで機中の人となった。

私は機の前部にある機銃席で、目を皿にして敵機を見張っていた。トラック島の上空に敵機は1機もいなかった。私たちが出払ったサイパン島が今、猛烈な空襲下にあるという。数日後サイパンに帰着すると、「お前は運のいいやつだなあ」と羨ましがられた。

3月初旬、我が戦闘機隊はサイパン基地を撤収し、全員航空母艦千代田でペリ



リニュー島に移動した。

ところが3月30日、ペリリニュー島は米58機動部隊に包囲され、二日間、連日空襲を受け、我が戦闘機隊は迎撃に飛び立った。だが、初日の戦闘で全機を失い、翌日、グアム・テニアン両島の基地から応援に飛来したゼロ戦52機も、夕刻までに全機南溟に消えた。両日の戦死者246名を数えた。その間私たち整備員は、迎撃戦で弾や燃料を使い果たして降りてくる機に、それらを補給してまた飛び立させる任務であった。

その度に私は「いくぞ！」と叫んで壕を飛び出し、「滑走路が俺の死に場所だ」と思つて、降りてきた機に向かつて駆けていった。上を見るとグラマンの編隊がこちらを目掛けて突っ込んできた。もう滑走路上に伏せるしかない。同時に、ダダ、ダと弾がコンクリートにはじける音が耳をつんざいた。体がもつと細ければと思つた。

立ち上がつてみると、数人の部下がついてきたのを知つたが、誰も傷した者はいない。続いて次の銃撃が来ぬ間にと駆け出した。皆オリンピック並みの早さだった。部下は滑走路に身を晒すと、空から狙い撃ちされるのを知りながら、誰一人としてひるむ者はいなかった。彼らは皆ラバウル以来の歴戦の勇士だった上、私の率先垂範が彼らを死地に突入させたの

だと思ふ。

やがて戦闘機がない防御力を失つた島は、いつ敵前上陸されても不思議ではなかつた。31日夜、総員集合が令され、中野司令から、「米軍上陸の公算大なり、我が隊は最後の一兵まで戦う」と訓示があつた。私たちは僅かな武器で海岸線に布陣して敵の上陸を待つた。この砂浜が俺の死に場所だと観念した。これまでラバウル、サイパンで何度も死に目に遭いながら、よくぞ生きてこられたものだ、もう年貢を納めてもいいと思ふようになっていた。しかし、又もや予想に反して、ペリリニュー島は翌日から、波の音しか聞こえない穏やかな日が続いた。

我が201航空隊は急遽、フィリピンのセブ島に移動することになった。私は特命により、ゼロ戦を中島飛行機製作所で受領して、セブ基地に空輸せよと出張を命ぜられた。パラオ基地に隠していた2式大艇(四発水上飛行艇)に便乗し、内地に向かつて飛んだ。玉砕が予想された島から8時間経つた頃、「日本に着いたぞ」の声で機上から見た房総半島の桜に涙が止まらなかつた。生きて二度と見ることはないと思つていた祖国日本に帰ることができたのである。その嬉しさは到底言葉にすることができない。

中島飛行機製作所で受領したゼロ戦は、一旦木更津基地に集合することになつていた。今だから言えるが、私は陸路移動すべきなのを、顔見知りのラバウル以来の搭乗員に頼み、ゼロ戦の胴体にもぐり込んで木更津まで飛んでもらつた。無断で戦闘機に同乗飛行した、海軍刑法に触れる大罪を犯していた。どうせ、フィリピンへ行けば生きて帰ることはないだろうと腹をくくつていたからだ。

受領したゼロ戦数十機と共に、先導する1式陸攻に乗つて、沖繩・台湾經由セブ基地に着いた。ところが、201空本隊は、ペリリニュー島からセブ基地に向かつたジョグジャ丸が、魚雷を受けて沈んだことを知らされた。私は出張のお陰で、再び太平洋で泳がずにすんだ。やはり、俺は運のいい男だ。

セブ基地では、9月12日、敵機動部隊の奇襲を受け、私たちが日本から空輸した新鋭ゼロ戦70数機が餌食にされてしまつた。201空本隊はルソン島マバラカツト基地に移動することになり、私は1式陸攻で行つた。

同基地では10月25日、世界史にも残る、戦闘機に250キロの爆弾を抱かせ、機もろとも敵艦に突っ込む特別攻撃隊を、日本で初めて我が隊から出すことになつた。当日、大西瀧治郎司令長官と水杯を交わした特攻隊員が、操縦席から我々に手を振つて出撃して往くのを、「総員、

帽ふれ」で見送った。機上の彼らの顔は、晴れ晴れとして、しかも凜として輝いて見えた。もうこれは人間業ではない、神の化身ではないかと思ふ。見紛うばかりだった。私と同じ若者が、祖国の危機を救わんと、進んで命を捧げようとする姿に、震えるような感動を覚えた。私も彼らと共にフィリピンの土になろうと心に誓った。

昭和20年1月、私は最後の戦場となったフィリピン・マバラカット基地にいた。温存していたゼロ戦は、すべて特攻として出撃し、戦闘機が一機もない状態に立ち至った。そのような中で、傷ついたゼロ戦を一機でも飛ばそうと夜通しで修理していた。そのとき、上司から呼び出され、「今夜0時近くのクラーク基地出発のダグラスDC3輸送機で茨城県の神之池基地へ行け」と告げられた。一瞬、夢ではないかと思った。当時の状況から見ても、自分の死が、そう遠い先ではないと諦めていた矢先だった。また日本に帰れるという嬉しさもあつたが、武器を持たない多くの隊員を基地に残したままである。命令とはいへ、自分の帰国に、後ろめたい気持ちも何時までも残つた。残存していたゼロ戦搭乗員と共に、ダグラス機でバシー海峡を越え、台湾・沖繩経由で日本に帰り着いた。

当時フィリピン・クラーク基地には毎日一機、双発の輸送機が日本から飛んで

きていたが、主として軍の高級幹部が日本との連絡に使用していた。その定員は15名程度、帰国したい将兵が山ほどいたのに、私ごとき一下士官を便乗させてくれたのが、今も不思議に思えるのである。憶測だが、多分私の3年余の戦場における、死を賭しての働きの褒章として、配

慮してくれたとしか考えられなかった。赴任した神之池航空基地は、世界史上でも稀な、ロケット推進の人間爆弾「桜花」を扱う、721航空隊の戦闘機隊、306飛行隊だった。富高基地に移動した我が戦闘機隊が、「桜花」を抱いて出撃する1式陸攻の護衛として出撃するのを見送った。だが、1式陸攻が鈍足のため途中で墜落され、「桜花」は咲かないまま散った。そのうち、広島・長崎の原爆禍があり、続いて終戦となった。

私の3年余の戦場体験は終わりを告げたが、同時にそれは、戦後に生きる私の人生を決定づけるものとなった。何度も捨てたはずの命が、ここに生きているのは、神が生かしてくれたのだと思わずにいられた。ならば生かされたこの命を、世に役立たせることが、その恩に報いる唯一の道である。と言う考えが揺るぎのないものとなり、強い自信となつて、

100歳になった私の人生をつくつてくれたといえる。

私が命を捨てて闘ってきたのは、国、平和と家族の平安のためだった。この体験記を、孫たちに託す平和の願いとしたい。

## 参考

### 1 著者の軍歴

昭和14年 横須賀航空隊に入隊。航空整備科予備練習生(一等整備兵)となる昭和17年9月 千歳航空隊戦闘機隊に配属

昭和18年7月、ラバウルへ移動。昭和19年、サイパン、トラック諸島、ペリリュー島などを経てフィリピンへ

昭和20年1月 茨城県の戦闘306飛行隊に転任。8月、宮崎県富高で終戦を迎える。

復員後、株式会社タダノ創業者多田野益雄(父)とともに日本で最初の油圧式トラッククレーンを創りあげた。

現在はタダノ名誉顧問に在籍。

2 その他(以下の情報がネットで検索可能です)

- ・NHKアーカイブ「多田野 弘さん 証言」NHK 戦争証言アーカイブス
- ・株式会社タダノのホームページ

tadano.co.jp/企業/航海日誌  
エッセイ「航海日誌」

桶川飛行学校平和祈念館と父伍井芳夫中佐

理事 白田 智子

1 陸軍飛行学校から平和を発信する施設へ

熊谷陸軍飛行学校桶川分教場は1935年(昭和10年)に現在の熊谷市に航空本部熊谷陸軍飛行学校の分校として1937年(昭和12年)6月に開校されました。各地から集まった生徒はここで寝食をともにしながら、陸軍航空兵になるための飛行機の操縦教育を受け、その後戦地に向かいました。

戦後、桶川分教場の建物は、引き揚げ者のための住宅「若宮寮」として使用されました。

2016年(平成28年)に、守衛棟、車庫棟、兵舎棟、便所棟、弾薬庫の5棟が市の文化財に指定され、2018年(平成30年)から2020年(令和2年)にかけて、これらの建物について復原整



備工事を実施しました。桶川分教場時代の建物を活用し、平和を発信し、平和を尊重する社会の実現、及び地域の振興に寄与するための施設として、2020年(令和2年8月)桶川飛行学校平和祈念館が開館しました。

・桶川分教所年表

1935年(昭和10年) 熊谷陸軍飛行学校「本校」開校

1937年(昭和12年) 桶川分教場の建物竣工 桶川分教場 開校

1943年(昭和18年) 生徒の増員により、建物を増築

1945年(昭和20年) 本校の閉校に伴い、桶川分教場閉校 以後、特別攻撃隊の訓練施設として使用される。

終戦

GHQ進駐 昭和21年頃まで、その後、建物は市営住宅「若宮寮」として平成19年まで使用される。

2007年(平成19年) NPO法人旧陸軍熊谷桶川飛行学校を語り継ぐ会より、1万4千筆の署名とともに建物等の保存を求める要望書が市に提出される。

2016年(平成28年) 桶川分教場の建物が市の有形文化財に指定される。

2018年(平成30年) 復原整備工事を実施(令和2年まで)

2020年(令和2年) 桶川分教場時代の建物を活用し、桶川飛行学校平和祈念館として開館。

2 伍井芳夫とその時代

伍井芳夫は1912年(明治45年)7月、北埼玉郡豊野村(現在の加須市)に父源助と母さたの二男として生まれ、小学校は豊野小学校に通い、中学校は加須の旧制不動岡中学校に入学しました。若いころから飛行機に憧れ、中学校卒業後に飛行兵を志願することになりました。

・飛行学校での日々

伍井芳夫は1932年(昭和7年)に飛行兵を志願し、飛行第五連隊へと入隊し、軍人としての道を歩み始めます。同年9月には下士官候補生として所沢陸軍飛行学校へ入校しました。1933年(昭和8年)4月に下士官候補生教育を修了し、1935年(昭和10年)からは操縦学生として所沢飛行学校へ通った。

翌1936年(昭和11年)1月に所沢飛行学校を修了しました。修業證書に所沢陸軍飛行学校長 男爵 徳川好敏様から修業證書を頂きました。徳川好敏様は1910年(明治43年)12月19日に代々木練兵場において日本で初めて飛行しました。

・熊谷陸軍飛行学校と伍井芳夫

伍井芳夫は1937年(昭和12年)3

月熊谷陸軍飛行学校附を命じられ、ここから熊谷陸軍飛行学校と伍井芳夫の関係が始まります。1941年(昭和16年)から1943年(昭和18年) 春まで大阪にて107防空隊に配属されたのち、桶川分教場に赴任した。陸軍特別操縦見習士官第一期生など、学校がもつとも多くの学生を受け入れていた昭和18年から19年にかけて、学校を取り仕切っていたのが伍井中尉だった。



桶川分教場に於ける飛行訓練風景

・第二十三振武隊長 伍井芳夫  
伍井大尉は1944年(昭和19年) 12

月に千葉県の下志津飛行場へ転属し、特攻の練習を指導するようになります。さらに1945年(昭和20年) 1月には第二十三振武隊が編成され、その隊長となり、伍井大尉は出身の所沢飛行学校、熊谷陸軍飛行学校などの教官も務めるが、己に比して遙かに経験が乏しい若者が次々と戦場に送り出され、または特攻隊志願して行くさまを間近に見て、教育の場に留まることはできなかつた。

昭18年10月から学徒出陣が始まり見習い士官として学生が次々と入校していた。訓練の記録が「學鷲」と言う雑誌に掲載されている。伍井中尉が桶川分教場を取り仕切る立場にいた、そのときの写真が學鷲を育てる教官と言う説明のある写真が残されているアルバムを妻園子は大切に持っていた。1944年(10月31日)長男芳則誕生する。その次の日伍井芳夫は大尉になった。12月に千葉県の下志津飛行場へ転属し、特攻の練習を指導するようになつていた。1945年(昭和20年1月)銚子飛行場で映画が作られている。「乙女のある基地」松竹映画に伍井大尉が飛行機



壬生出発前の伍井芳夫隊長

の操縦者の監督を頼まれていた。飛行機に乗る操縦者は後に特攻となる第二十三振武隊の人達だった。飛行兵がたりないと1年9ヶ月と短縮されていた。燃料も、飛行機も不足していた。

第二十三振武隊が編成され伍井大尉が隊長となり、3月、栃木県の壬生飛行場へ移動、3月27日壬生飛行場を出発し、桶川の住む親子4人に別れるため上空から2回旋回して翼を振り西の空へ消えていった。知覧飛行場へ向かった。4月1日に知覧飛行場から沖縄の慶良間諸島へ向けて出撃し帰らぬ人になり、「特進にて伍井中佐」となる。

75年前、戦争の時代を背負う人達がいた、その人達の為にも忘れません、そして二度と戦争の無い平和を願っています。



築城基地開設五十年史より (其の一)  
海軍航空隊特攻基地を知る

会員 水町博勝

任務は

一 艦船搭乗員の練成教育

二 母艦補充搭乗員練成準備及び機材整備

築城基地は海軍・米軍・航空自衛隊へと継いだ基地です。平成四年に開設から

尚記念史発行の責任者元司令には了解を得ています。

五十年の節目を迎え、第八航空団司令兼築城基地司令大串将補のもとで、基地の歴史を後世に残す記念誌を作成する事になり、小生監理部長とし担当部署に在任し、部員と共に海軍の施設跡を探索し、海軍OBの会「築城空の会」元飛行隊長、元特攻隊員、元整備員、元軍属等から想い出を収録し五十年史を編纂しました。

昭和十四年春、海軍中佐が村役場訪ね「我が帝国海軍は、戦争遂行のためこの地に飛行場建設を計画しているので協力されたい」と通知され、年末には用地買収、建設業者は藤田組・大林組、開戦昭和十六年十二月八日には滑走路・構築物が形を整えつつありました。

昭和十七年四月ミッドウェイ海戦後、虎の子の空母と練達の母艦搭乗員多数を失い、同年六月に搭乗員の急速補充が課題となり、練成基地に築城、鹿屋、高雄が選ばれました。

同年十月一日築城海軍航空隊(仮称)が富高(日向)に開隊、第三艦隊に附属

昭和十七年四月ミッドウェイ海戦後、虎の子の空母と練達の母艦搭乗員多数を失い、同年六月に搭乗員の急速補充が課題となり、練成基地に築城、鹿屋、高雄が選ばれました。

同年十月一日築城海軍航空隊(仮称)が富高(日向)に開隊、第三艦隊に附属

昭和十七年四月ミッドウェイ海戦後、虎の子の空母と練達の母艦搭乗員多数を失い、同年六月に搭乗員の急速補充が課題となり、練成基地に築城、鹿屋、高雄が選ばれました。

同年十月一日築城海軍航空隊(仮称)が富高(日向)に開隊、第三艦隊に附属

昭和十七年四月ミッドウェイ海戦後、虎の子の空母と練達の母艦搭乗員多数を失い、同年六月に搭乗員の急速補充が課題となり、練成基地に築城、鹿屋、高雄が選ばれました。

同年十月一日築城海軍航空隊(仮称)が富高(日向)に開隊、第三艦隊に附属

昭和十七年四月ミッドウェイ海戦後、虎の子の空母と練達の母艦搭乗員多数を失い、同年六月に搭乗員の急速補充が課題となり、練成基地に築城、鹿屋、高雄が選ばれました。

同年十月一日築城海軍航空隊(仮称)が富高(日向)に開隊、第三艦隊に附属

昭和十七年四月ミッドウェイ海戦後、虎の子の空母と練達の母艦搭乗員多数を失い、同年六月に搭乗員の急速補充が課題となり、練成基地に築城、鹿屋、高雄が選ばれました。

同年十月一日築城海軍航空隊(仮称)が富高(日向)に開隊、第三艦隊に附属

昭和十七年四月ミッドウェイ海戦後、虎の子の空母と練達の母艦搭乗員多数を失い、同年六月に搭乗員の急速補充が課題となり、練成基地に築城、鹿屋、高雄が選ばれました。

同年十月一日築城海軍航空隊(仮称)が富高(日向)に開隊、第三艦隊に附属

昭和十七年四月ミッドウェイ海戦後、虎の子の空母と練達の母艦搭乗員多数を失い、同年六月に搭乗員の急速補充が課題となり、練成基地に築城、鹿屋、高雄が選ばれました。

同年十月一日築城海軍航空隊(仮称)が富高(日向)に開隊、第三艦隊に附属

昭和十七年四月ミッドウェイ海戦後、虎の子の空母と練達の母艦搭乗員多数を失い、同年六月に搭乗員の急速補充が課題となり、練成基地に築城、鹿屋、高雄が選ばれました。

同年十月一日築城海軍航空隊(仮称)が富高(日向)に開隊、第三艦隊に附属

昭和十七年四月ミッドウェイ海戦後、虎の子の空母と練達の母艦搭乗員多数を失い、同年六月に搭乗員の急速補充が課題となり、練成基地に築城、鹿屋、高雄が選ばれました。

同年十月一日築城海軍航空隊(仮称)が富高(日向)に開隊、第三艦隊に附属



昭和十七年四月ミッドウェイ海戦後、虎の子の空母と練達の母艦搭乗員多数を失い、同年六月に搭乗員の急速補充が課題となり、練成基地に築城、鹿屋、高雄が選ばれました。同年十月一日築城海軍航空隊(仮称)が富高(日向)に開隊、第三艦隊に附属

九月一日付で転勤しましたが、それまでは南方方面やサイパンの苦難の時期もかわらず、平穩に練習航空隊としての本務を果たしておりました。昭和二十年になりますと、築城海軍航空隊も第五航空艦隊第十二飛行隊に編入され、戦況の悪化に従って空襲を受け多数の戦死者を出し、特攻隊も編成され、攻撃部隊の出撃舞台になりました。志半ばにして国運のため散華された方々を思い致すとき新たな涙を禁じ得ません。

終戦後、周辺十一ヶ市町村の方のご尽力により正門の近くに「殉国勇士之碑」が建てられました。



平成四年八月一日には基地創設五十周年記念式典が航空自衛隊により厳粛に執り行われ、併せて先の大戦の戦死者と航空自衛隊殉職者の慰霊祭が行われました。

航空自衛隊、周辺十一ヶ市町村、旧軍関係者により合同で挙行されました。「築城空の会」会員一同、誠に感謝に堪えません。あらためて感謝の意を表します。基地五十周年誌発刊を機に自衛隊築城基地の更なる充実、発展を祈って発刊の言葉とします。

願わくは航空自衛隊の皆様、厳しい世論の中に護国の大任を果たされんことをお願いする次第であります。(築城空の会代表)

・殉国勇士之碑建立の経緯  
神風特別攻撃隊菊水隊  
元海軍少尉 岩男富好

地域の古老によると、昭和二十年八月七日十一時四十五分頃、海岸上空から侵入のB-24による爆撃によって開始され、折から航空機の迷彩作業中の予科練習生達と防空壕の穴掘りに徴用で来ていた農家の人たちは、警報と同時に基地外の防風林の松林と重箱池(灌漑用)の畔に退避したが、上からの格好の目標になったらしく、以前より椎田奥の山影で旋回中のグラマンによる執拗な超低空波状機銃掃射は凄惨を極め、戦死者三十七柱の内甲飛出身十六柱の同期が戦死、七十余人の重症者が続出した。そして滑走路上にあつた銀河五機、零戦二機、一式陸攻三機も攻撃を受け炎上の被害を蒙った。

混乱の中、航空隊員の手によって遺体を収容し、戦死者は城井川の河原で茶毘に付された。その折、地元の方々は空襲の下、当時軍の事後処理に挺身され高塚の婦人会の方々が更に残っていた骨肉片、衣類片を高塚墓地に埋葬、婦人会の手によって卒塔婆を建て、その石に「無名戦士の碑」と刻み供養されて以来、毎年命日には法要を行ってこられたのが、この碑の起りである。

月日は流れ昭和五十三年、築城基地協賛会(基地周辺十一ヶ市町村で結成)、基地



殉国勇士の碑

隊員(久松司令)、地元有志の発起により同年七月二十三日築城基地正門前重箱池近くに航空自衛隊生みの親である参議院議員源田 實氏揮毫による見事なる「殉国勇士之碑」が建立され、多くの関係者列席の下で厳肅の中に盛大なる竣工除幕の式典が挙行された。

昭和五十四年十一月二日航空自衛隊築城基地開設二十五周年記念式典に築城空の会が招聘を受けた機会に「殉国勇士之碑」前においてお礼を兼ね慰霊祭と参拝記念行事としてのかねてから念願の「三十三回忌築城空の会慰霊祭」を全国から参集の会員の手によって盛大に挙行された。

西田飛行隊長の「この地に眠る同志の皆さん、どうか心安らかに眠りください、そして私たちの築城空の会をお守りください。又永遠に築城基地の守護神として祖国をお守り下さい。」と声涙ともに下る祭文奏上に並み居る参列者も滂沱たる涙に頬を濡らしながら敬虔に祈りを捧げた。かくして吾々が三十幾星霜気にかかけつつも実現できなかった慰霊祭を、意義ある基地開設二十五周年を機に盛大に挙行することが出来て、何か肩の荷が降りた様な安堵を覚えたのは自分一人ではなかった。

平成四年八月一日築城基地創設五十年

周年記念に際して、合同慰霊祭が挙行され航空自衛隊築城基地が昭和二十九年創設されて以来、国土防衛に任じながらこの地に散華された二十四柱の御霊を追悼するための顕彰碑と銘板碑を新たに建立し「殉国勇士之碑」に合祀された。

当日は殉職隊員顕彰碑除幕式が十七時より関係者参列の下、厳肅に執り行われ築城空の会からは山代飛行長、西田飛行隊長、岩男(生徒代表)野見山(甲飛代表)の四名が会を代表して列席した。「殉国勇士之碑」は建立されて以来今日迄永年にならぬが基地隊員の方々の手により清掃が行われ又毎年八月には碑前において慰霊祭が執り行われている。

岩男氏略歴

学徒出陣 興亜専門学校現在亜細亜大  
相浦海兵団入団 一期予備生徒  
三重航空隊、築城航空隊  
巴建設株式会社 代表取締役

筆者追記

「殉国勇士之碑」の前左右には顕彰碑があり、向かって左の海軍航空隊の碑には「昭和十六年大東亜戦争勃発全十七年築城海軍航空隊創設され祖国防衛に任ず全二十年米軍の空襲を有くこと数回海軍軍人並びに全軍属等悲壮なる戦死を遂

げたる者多し 全二十年八月十五日終戦となり幾度か志ある者によって追悼の木碑を建つ 終戦後三十三年を経たる今日 平和日本の興隆を見る茲に築城基地周辺十一市町村相議り祖国勇士の碑を建て永久に御霊を祭る」と刻まれています。右には五十年記念の「合祀殉職隊員顕彰碑」があります。



合祀殉職隊員顕彰碑

「殉国勇士之碑」の背後には海軍の戦死者一一四名、航空自衛隊殉職者二四名、氏名と出身県がそれぞれ刻まれています。町内の「無名戦士の碑」を供養されていた婦人会の方から、この碑が建立された



ことで無辜の霊が安らかになり、安堵し悲惨な夢を見ることから解き放されたと伺ったことがあります。

基地協賛会、地元の方により、碑の位置は基地の外にあり、誰もが訪ねることが出来ます。特に、基地開放・航空祭の日は、日豊線築城駅を降りた数万の来訪者は、隊員が清掃し、花を捧げた碑の前を必ず通ることになります。

戦後七十六年になろうとする中、各地にある特攻隊関連慰霊碑は、係わった市町村・祈念館・寺社・旧軍基地を継ぐ自衛隊基地に所在するところは忘れ去られる事はありません。慰霊の誠を捧げた戦友が居なくとも、此処「殉国勇士之碑」は厳然と、後世に語りかけてくれているのです。

続きは、基地建設に当たられた方の思い出を紹介いたします。

**築城基地開設五十年史より (其の二)  
基地建設を知る**

会員 水町博勝

自衛隊の飛行場は旧陸軍・海軍が建設、その後米軍はジェット機を使用するため拡張整備され、後に自衛隊では保安用地を拡張し現在に至っています。



上：海軍時代の築城基地



左上：米軍時代



左下：現在の築城基地

当時の建設機材は現在と異なる中で、如何にして造られたかに興味がありました。

小生、基地の外に今も残る航空機掩体を探索、入口幅二十五m奥行二十二mの前方から後方を見ています。陸上爆撃機「銀河」幅二十m全長十五mクラスが使



航空機掩体

用可能、朽ちる事無く堅牢に出来ていました。

その飛行場、掩体・トンネルの建設に当たられた二人の方の思い出です。

**基地建設時の思い出**

(株) 廣島藤田組 則松 純吾

一、はじめに

この度築城基地開設五十年史刊行のために、編集室より建設工事の回顧録の投稿を求められ寄稿することになりました。しかし、筆者の入社時は着工一年あ



まり後でありますから、この間の事例については事跡等で知り得た範囲内で記述しましたが、発刊にいささかなりとも裨益することがあれば幸いに存じます。



右は呉海軍施設部作成の築城基地図面二、工事着工

築城基地は昭和十五年春より呉海軍築城航空隊として、旧京都郡中津村大字松原大字西八田の一部にわたる範囲で着工されました。

筆者の在職中(昭和十六年八月〜昭和十七年十月)の間に設計変更で当初の設計よりかなり拡張されたと聞いております。工事は関連施設、監督官事務所、工員宿舎と始まり、施設は総て基地に隣接する民有地を借り上げて建設しました。

監督官事務所は中津村松原一〇七三番

地に建設され、作業員宿舎は(軍徴員工員用)は中津村松原二八六〜二八七番地に建設されて、敷地の借り上げ対象に筆者の所有地が含まれており今なお思い出深きものがあります。なお、工員宿舎は昭和十九年頃に全焼したと聞いている。現場事務所(土木工事請負業者)は中津村松原一〇四九番地に筆者分家の倉庫を借用、現場事務所兼社員宿舎を開設しました。

### 三、通信連絡

行橋電話局より一回線が監督官事務所に引き込まれて、監督官事務所経由の呼び出し方式で行われていた。市外電話になれば接続に長時間を要し、特に悪天候時には頻繁な連絡があり、雨中駆け足で駆けつけ等苦勞が多かった。

### 四、物資供給

築城駅前には物資配給所を開設して建設作業員の必需物資は、取扱業者と契約し配達に当たらせた。現在流にみれば田舎のスーパー程度の品数は確保されていた。しかし、戦時体制が進行すると物資の導入にも苦勞があったようである。時折珍品の入荷時は事務所への差し入れがあり歓声を以て迎えたことが思い出になる。

### 五、工事現場関係

土木工事では、直接の下請けは二社であった。しかしその二社に連なる業者は大小合わせ四十余の野帳場が開設され工期を目指して一斉にスタートした。時は昭和十五年も半ば過ぎであったと想

う。我々先輩現場員は各自分担当区域を巡視し工事進捗状況報の把握が主任務であった。しかし、分担現場の一巡には半日を要した。

### 六、期待を裏切った新鋭機械

戦時体制下で急を要した基地建設で、早期竣工を目指しての竣工であった。しかし、事前調査の甘さか、当時最新鋭機械といわれ導入したスチームショベルを試運転段階にて、築城基地の土質(粘土質)に使用不能なることが判明して、新鋭機械は日の目を見ずに解体された。現在の進歩した土木機械に比べると今昔の差を感じる。

### 七、活躍した軌道牽引車

一斉に開始された四十余カ所の帳場は、トロッコ軌道が敷かれ短区間では数十米から長区間では一糎米を超える帳場があった。掘削は専ら人力により、運搬は手押しのトロッコが主体であった。帳場の拡大に伴って活躍したガソリンエンジン牽引車が、トロッコ数拾台を連結して走る

風景は鉾山の炭車を連想させるものがあつた。

八、雨のいたずら

先人達の諺によれば、土方殺すに刃物はいらぬ、雨の十日も振ればよいとか言

われますが、土木工事の大敵は雨である。

雨上がりの一日のこと、監督官事務所前に設置した展望台立った監督官より現場

事務所長へ呼出しがあつた。所長が何う

と強い語調で水溜まりの個所の整地手直

し工事の指示を受けて、洗面顔で戻つた

所長の姿が目には浮かぶ。又ある夏の昼下

がりのこと、同僚と共に測量に出掛けた

筆者は、作業を終わり木陰で昼寝中のこ

と雨音で目覚めた二人が側の測量機に気

付けば機械は水浸しになって故障し使用

不能になつた。事務所に戻ると上司より

大目玉を頂戴し、翌日同僚と共にすごす

ご博多まで修理に行つたことが想い出さ

れる。雨のいたずらとは本当に恨めしく

思つた。

九、狩場と化した低湿地

埋立ての進行に伴つて排水の悪い処は、池沼化して鮎など淡水魚の溜り場となつ

た。休日には網を手にした作業員の姿が

見られた。また冬期間は水鳥の休息地と

なり格好の猟場でもあつた。雪の夜知人

に誘われ鴨猟に出掛けた事も語り草となつた。終わりに築城基地勤務も一年あまり

で工事完了を見ることなく、転勤で昭和

十七年十月に築城現場を去る。

則松氏略歴

昭和十八年十二月 野砲第二十六部隊入

隊

昭和二十年十月 藤田組退社

昭和六十二年四月 行橋市松原区長

『築城基地掩体壕・末広のトンネル・

滑走路建設の思い出』

(株)ティー・オー・ジー代表取締役会長

岡本 佳海(本名 朴 佳玉)

今から五十年前の昭和十七年から二十

年まで筆舌に尽くし難い戦争苦難の四年

間であり、その四年間は築城基地での飛

行場建設にたずさわつたことです。

あれから半世紀、今再びこの築城基地

を訪れ私達の汗と涙の跡を見る度に、当

時が昨日のように生々しく思い出され胸

が熱くなります。ここには私たちの青春

の一時期があるのです。当時十六歳で日

本に來た私は大阪に落ち着き、それから

数年、日増しに軍国主義が強まる時期で

したが、大阪にはまだ自由な空気があり

ました。妻と二人の生活が軌道に乗りか

軍の徴用で関西地区から私を含めて三百人が大阪駅のガード下に集められました。日本人二百人、朝鮮人百人の全員が直ちに列車で広島の江田島に向い、ここで二カ月間猛烈な精神訓練の後、我々三百人はこの築城の海軍航空隊・海軍施設部に勤務を命ぜられました。築城には当時『赤トンボ』と呼ばれた複葉機ばかりで、私の仕事は後から来る零戦を格納する掩体壕づくりでした。今のような作業機械はなく、すべてが手作業で、来る日も来る日も鉄板上で、セメント・砂・水を混ぜ合わせそれをモッコに入れ天秤棒でかつぎ、大きな土まんじゅうのような掩体壕の上に運び上げる仕事は大変なものでした。

大阪からきた人達は土木経験は全くな

く、たつた一日の仕事で肩の皮が剥がれ

血がにじみ出る始末です。朝鮮四班、日

本八班に編成され、私はその中の一つ朝

鮮班の班長として指揮を取っていました。

この年の夏は、猛暑続きだったので喉は

カラカラ、脱水状態で早く一杯のお茶が

飲みたい、そんなある日の正午過ぎ全員

に海軍式の「作業止め！」の号令がかか

ると、我先にとお茶飲場に並びました。

班長の私はいつものように一番最後に立つ

ていると、私の班で金山君(痩せた小男)に大男の井手という男が「朝鮮人はのけ!」と言って列に割込み、順番を待っていた金山君の顔を殴りつけたのです。私は頭に血が上り、「日本人も朝鮮人もない!大東亜戦争に勝ち抜く為に飛行場建設に参加しているのに、『お前は朝鮮人だ』とか『お前は日本人だ』とかこんな差別がまかり通るようでは作業はできない!」と高台に昇って声高らかに叫びました。たちどころに「作業止めよう」と言う声が出て来て朝鮮班百人全員は、午後三時頃作業道具をまとめて宿舎に戻ってしまったのです。(今で言うゼネストである)食事もとらず全員宿舎で横になっていると午後十時頃、守衛(新田原駅前旅館 木本勇氏)が私を呼びに来ました。呼ばれて宿舎を出ていく時『岡本班長ガンバレ』の小さな声で暗い所から、数々の声援がありました。今でも耳にはつきりと残っています。事務室に入ったら顔も見たくない井出君も来ていて、舎監の兵曹長が「話は井出から全て聞いた、今回の件は全面的に井出が悪い、岡本班長に謝れ」と言っ土下座させたり、「謝り方が悪い」と言っ拳骨が飛んだりしました。井出君も「私が悪かった」と素直に謝罪

してくれました。「岡本君、これで勘弁してくれ」と言う舎監の兵曹長の話には伸直りし、私たちの気持ち少しは通じたのだと、この夜の事は今でも強烈に頭の中に焼き付いています。その年の暮れ近く数多くの掩体壕は完成しました。当時、私は週に二日は外泊できたため、妻を大阪から呼び寄せ築城町松原の原田醤油屋さんの一隅に住まわせていました。或る日の朝礼で私は名前を呼ばれ一瞬『外地か戦場行きか』とドキッとしました。命令は『只今より広末に転勤を命ず』でした。飛行場から約一キロ半ほどの場所、『ホットヒと安心』私は仲間から切り離され、一人広末に赴くことになりました。広末では魚雷を格納するトンネルを山腹に何本も掘るのが仕事(昼夜兼行)でした。

作業員約百人は全員朝鮮の人達で、トンネル作業は専門家の仕事であり、旧制高松工業高校の学生八名で設計、請負業者は大分県の『佐伯建設』で、社長自らの指揮が進められ完成(完成と言ってもトンネルが使えればよい程度)しました。そこで私の仕事はトンネル掘削用の火薬の管理でした。工事には事故がつきもので、不発火薬が後から発火したり、天井にハングル文字で『火の用心』と書いたところ、人々は『誰が書いたのか』と随分と関心を持ったようでした。トンネル工事期間中は、川向こうの久保さんの奥さんには、私をはじめ人夫が大変御世話になりました。今は久保さんの家は無くなり、寂しい限りです。

トンネル工事が終わり、今度は滑走路の拡張工事でした。築城村郷原・築上郡・京都郡、その他の地区から三百台の馬車



入口十五のトンネル測量図 (作成施設隊)

を徴用し、切り込みやグリ石・砂・セメントを運びました。ここでの私の仕事は滑走路現場で運ばれる諸材料の体積を計算し、給金を計算する事でした。馬車組合の組合長は添田の菊池勇氏(後の民主党県議員)で、氏に築城基地空襲で犠牲になった馬肉を分けてもらったところが、家内は、馬肉は食べるものではないと思っていましたので、「牛肉だ」と言って渡すのが調理すると匂いも違い泡が出るのですぐ判ってしまい苦情を言われるのには閉口したものです。今でも家内は口にせず、私だけが食べています。

終戦の日も忘れません。郷原の馬車組合事務所に、軍属や馬車組合の人たち大勢が集まっている席上で、椎田の獣医さんが「日本は戦争に負けた、朝鮮は独立し台湾も中国に還し樺太も無くなった。朝鮮人は独立した事で、今までの恨みで暴れるかもしれない」と演説したのです。その時ほど驚いたことはありませんでした。今の今まで、日本が負けたことで、皆と共に悔し涙を流したばかりなのに、余りにも見下げた心なしの言い方と抗議した、獣医さんは、皆の前で全面的に撤回し、誤ったのでその場はおさまったのです。

それにしても滑走路は別として、掩体壕やトンネルは皆であんなに苦勞して造ったのに、殆ど使用せずに終戦を迎え残念でなりません。掩体壕やトンネルを見ますと私たちの血と汗の結晶が放置されているのに胸が痛みます。トンネルはエノキダケの栽培場に、日本酒の保存にはトンネルが一番良いとか新聞等で言われていますし、掩体壕は天井も高く立派な建物なので農家の方達への何か良い利用法はないものかと日々思っています。私にとって第二の故郷だけにこの思いは強いものがあります。

岡本氏略歴

築城海軍施設部軍属昭和十七年〜終戦まで  
北九州市で事業を起す

北九州商工会議所常議員

筆者追記

基地図面の北側松原地区には民家があり、移転・収容が必要であった。建設会社の藤田組は基地建設の対策として、松原地区から則松氏を社員として採用し、工事関係者の宿舍借り上げ等人脈を活用した。

岡本氏の思い出には戦時下の朝鮮人の徴用について、戦時特有の徴用とは、国

家権力によって強制的に動員し、一定の業務につかせること。基地の掩体壕・トンネル・滑走路工事で日本の為に尽くしているのに人種差別に遭う、氏の憤りに共感を覚えた。

航空機の掩体壕を実際に見て回ったが、良く分散を考えて作られ、基地の外に点々として正に戦争記念物ですが、放置されたままでした。又トンネルは弾薬・燃料・被服・糧食等戦力維持の保管庫として使われました。

現在はトンネルの入り口を柵で封鎖し、立ち入らせない状態です。

八月号に、零戦パイロットの回想を紹介いたします。

余談になりますが、世田谷山観音寺の特攻観音月例法要の折、元零戦パイロット野口剛氏にお会いし、氏は「桜花」の第七二一海軍航空隊神雷部隊の護衛戦闘機隊に所属、鹿屋空襲により使用不能、築城基地に後退して、終戦を築城基地で迎えました。と伺いこの築城基地五十年史の戦時の一部を複写しお渡したことを、思い出しております。



第二〇戦隊及び基地第二〇大隊戦闘経過

會員 中溝 二郎

海上挺進第二〇戦隊は、通称暁第一九七五九部隊と称し、昭和十九年十月十五日宇品において正式に編成された。

戦隊長は陸士五四期の住田隆大尉で、第一中隊長は関国重中尉、第二中隊長は中山忠中尉（いずれも陸士五六期）、第三中隊長は松尾弘少尉（陸士五七期）、副官として湯本次郎見習士官（幹候一期 二〇年一月少尉）がおり、群長は豊浜の船舶幹候隊出身の一期見習士官であつたが、隊員はこれまでの各戦隊と異なり船舶特幹ではなく、すべて各地の部隊より選抜された現役下士官（曹長、軍曹、伍長）と下士官候補者（兵長、上等兵）で編成されていた。

この戦隊は、本来の予定地は南部ルソンのバタンガス州バラヤンのバハとされており、編成後も幸ノ浦基地で舟艇訓練をした後、十一月四日秋津丸に乗船して宇品を出発し、門司を通過して一度朝鮮の釜山港に廻航、ここで満州より転進して比島に向かう旭（第二三師団）第六四連隊の主力を乗船させた後、八日に再び門司に寄港し、十四日に基地大隊の後発となつた一部と共に、門司を出航した。

船団が玄界灘を接岸航行し、上海沖に向かったところ、護衛艦が敵潜を探知したため、（十二日から十三日にかけて朝鮮沖で米潜水艦の出没が激しく、一八戦隊が被害を出している。）反転して五島列島宇久島水道に避泊、翌十五日朝同水道を出発したが、十一時頃五島列島福江島西方四十キロ附近において突如秋津丸が米潜水艦の雷撃を受け数分後に沈没した。この時、第二中隊長中山中尉を始め、見習士官五名、下士官四十三名が戦死した。

又、海上を漂流中の戦隊長以下二十三名は、翌日佐世保からの駆船艇に救助され、五島の福江港に廻航して上陸し、同日から佐世保に着き、佐世保から二十九日に宇品の船舶司令部に帰着した。

一方、第一中隊長関国重中尉以下二十名は海防艦「昭南」に、第三中隊長松尾弘少尉以下十二名は海防艦「大東」に救助され、後それぞれ吉備津丸、神州丸に移乗して、二十六日台湾の高雄に着いた。高雄に着いた戦隊員は上陸後、第四海上挺進基地本部（隊長 高良 中少佐（陸士四一期））の指揮下に入った。

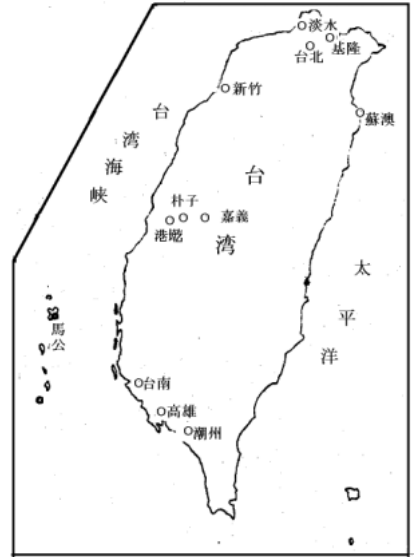
幸ノ浦に帰っていた戦隊長以下は、既に比島渡航は極めて困難になつたため、翌昭和二十年一月二十二日に、改めて台



湾軍（第一〇方面軍）派遣に変更され、広島を出発して再び門司に着き、三十一日に撰津丸に乗船して門司を發ち、二月六日に台湾の基隆に上陸した。

二月十七日に改めて台湾軍第一〇方面軍の安藤利吉大将の指揮下に入り、台湾先着の戦隊員を纏めて、三月五日基隆を出発、翌六日に台南州東石郡港（朴子の西方四km）に着き、この国民学校を接収して駐留し、ここで出撃の準備や、教育訓練に当たっていた。

なおこの戦隊には、当初一八戦隊の第三中隊（中隊長久保三郎少尉と見習士官、特幹等総員十五名）が、十一月十七日乗



船した鎮海丸が沈没し、救助されて呉淞―南京―浦口―釜山を経由して幸ノ浦に帰っていたので二十年一月六日に前記の欠員補充のため、第二〇戦隊に転入の命令が出され、以後二〇戦隊の第三中隊として行動を共にした。(特幹二名の補充があった)

こうしてこの戦隊は、台湾に変更となったが、被害は前記の海没者及び台湾嘉義陸軍病院での死亡を含め将校・見習士官六名、下士官四十三名の合計四十九名の戦死があった。

海上挺進基地第二〇大隊は、暁第七二六〇部隊と称し、昭和十九年九月十八日に、盛岡の東部七〇部隊に集められた召集者を主とし、大隊長は特別現役志願将校の友永二郎大尉で、第一中隊長は木内

中尉、第二中隊長は鳥山中尉、第三中隊長は堀中尉で編成された。

基地大隊の第一陣(本部及び第一中隊)は、十月六日泰洋丸に乗船して宇品を出港し、二十一日高雄港着、二十三日出港したが、十月二十六日バシー海峡にかかった時、前記の他の隊と同様に、米潜水艦の魚雷攻撃を受け乗船は沈没し海没者多数を出した。

生存者は二十八日にルソン島の北サンフェルナンドの北方サルマゲに上陸し、十一月月上旬に、海上輸送によって、ここから北サンフェルナンドに移動し、更そこから列車輸送でマニラ市に着き、同市のケソン地区のサンタメサ教会に本部を置き、後発隊の到着を待っていた。

一方、第二陣となった第二、第三中隊は、十月八日に宇品から生和丸に乗船して出発し、これは海上無事に十一月十日にマニラ市に着き、先発の本部及び第一中隊の生存者と合流した。

集結終了後、十一月の下旬にバタンガス州バラヤン・バハに基地設定の命令を受け、十二月十四日第一中隊は自動車輸送によってバラヤンに向い、十二月二十三日に同地に集結して基地設営に着手した。

ところが、第二〇戦隊の比島到着が遅

れていたため、大隊の主力は更にマニラ市の東方アンチポロ及び北方二〇キロ付近にあるリサール州、オバンド、ダンバリット地域に移動の命令を受けて、再び北上して、同地区で基地設定に従事することとなり、大隊本部はダンバリット(第一七戦隊、第一八戦隊及び基地隊の一部が所在していた)に移駐し、陸上戦闘用の陣地及び基地の築造に当たった。

昭和二十年一月九日リングエンに米軍の上陸を受けると、この地域は、リングエン―マニラの街道筋に当たっていたた



め、米軍の南進に伴い、二月に入ると急速に陣地強化が必要になり、第一中隊に部所在地への復帰命令を出した。

第一中隊は南下して、米軍の第一線と途中で遭遇することになって戦闘を行なった後、大隊長の指揮下に復した。

二月十一日からは、戦車兵団を主力とする米軍並びに組織ゲリラ隊の本格的な攻撃を受け、同地区で第一七大隊らとともに激戦となり、二月十四日オバンドの南側橋梁、ウルチチーモンタルバンの線を撤退してモンタルバン（マニラ東北方）に後退したが、この戦闘では多くの戦死者を出した。

なおこの頃一部小数の者は、ダンバリットを撤退してオバンド方面に移動し、第一七戦隊員とともにマニラ湾を舟艇で横断し、バターン半島に撤退した者もあった。

大隊本部は、モンタルバンに移動した後、通称五訓山（モンタルバン東南の高地）に転進し、この地域で遊撃戦を行なったが、大隊長以下大隊の幹部及び主力の兵力はほとんど戦死するに至った。

なお大隊の第四中隊（整備中隊？）は、戦隊と同じ秋津丸に乗船し、十一月十二日門司を出港し、十五日に五島沖を出て、済州島沖にかかった際、潜水艦の魚雷攻

撃により海没し、多くの被害を出し、救助された生存者のうち、一部は内地に、一部は改めて台湾に送られ、台湾で第五大隊の整備中隊らとともに臨時海上挺進第二〇基地大隊（暁第一二八七九部隊）が編成された。

更に大隊本部と各中隊の者で、後発となっていた七名が、秋津丸に同乗していたが、前記のように秋津丸の撃沈により、このうち二名が五島沖で海没戦死し、救助された五名の者は、他の船舶に救助されたため、目的通り比島には到着できなかったが、遂に本隊に合流することができず、他の部隊に属して戦闘を行ない、生存者は一名のみとなった。

大隊の総員は八九七名で、比島に渡って生還した者は二十一名に過ぎないといわれている。

海没

第二〇戦隊第三中隊長 松尾 弘

（本手記は広島幸ノ浦の“海上挺進戦隊没者慰霊碑 顕彰会”の「顕彰会報」第六号に掲載されていたものを本誌に転載いたしました。）

昭和十九年九月初旬、旧満洲ハルビン近郊の重砲聯隊に居た私は、「補船舶司令部附」の電報辞令を受けて広島・宇品

の船司へ急行したが、着いてから判ったのは、新設された爆装モーターボート部隊の中隊長要員であった。十月十五日動員下令、正式に海挺二十戦隊第三中隊長として、学徒出願の小隊長三名、下士官隊員二十七名、爆装舟艇三十隻を預かる身となった。十一月三日、宇品港にて「あきつ丸」に乗船、四日早朝出航、「さらば祖国よ……」。

大君の 命（みこと）畏（かしこ）み  
磯に触（ふ）り  
海原（うのはら）渡る  
父母を置いて  
（万葉集四三二八）

和歌の大意  
大君の 御命令を畏んで、磯を渡り、海原を渡って行く。父母を故郷に置いて

運命の「ヒ八一」船団  
日本古典文学大系 訳

秋色濃い昭和十九年十一月、風雲急を告げる比島戦線に馳せ参ずべく、ここ門司港外六連泊地に集う数隻の輸送船があった。何れも将兵、武器、弾薬を満載してその吃水は深かった。旭二十三師団を主力とする各部隊である。通信、戦車、野砲重砲の各学校を繰り上げ卒業した南方要員の少年兵、比島派遣最後の海挺戦隊である私の部隊もその中であつた。「ヒ

八一」船団として、十三日門司を出撃したこの船団は、第八護衛船団司令官佐藤海軍少将が乗った基準船「聖川丸」を先頭に、タンカー五隻及び陸軍特殊船（上陸用舟艇母艦）の「あきつ丸」「摩耶山丸」「神州丸」「吉備津丸」の四隻、何れも一万屯級である。そして護衛は、ドイツ客船シャルンホルスト改造の空母「神鷹」（二万一千屯）、直衛駆逐艦

「樫」、それに「大東」「昭南」「対馬」など五隻の海防艦で、当時の日本としては精一杯の、というより最高の船団であった。

（ヒ船団とは、もともと門司―昭南間を往来する高速（A）及び中速（B）の石油船団であるが、護衛艦の不足で陸軍部隊のみの輸送は思いもよらぬ戦況で、タンカー船団との合流となった訳である。）

十四日、佐賀県の伊万里湾を出た船団は、十二ノットの速力で一路上海を目指したが、昼前早くも護衛艦は敵潜を探知し、船団は急ぎ変針して長崎県五島列島北端の宇久島水道に仮泊し、護衛艦は敵潜の掃討に当たった。そして翌十五日早朝、船団は宇久島水道を離れた。「神鷹」の搭載機九七艦攻二機が常時在空中で哨戒し、護衛艦ががちりと周囲を固めている。「之」字運動を始めた「あきつ丸」

の船上で、私は数時間後の悲劇など予想もし得なかった。「魔のバシー海峡」のことは耳にし覚悟もしていたが、上海迄に「あきつ丸」「摩耶山丸」それに空母「神鷹」と計三隻も失うなどとは、全将兵が思いもかけなかった事であろう。然し、悲劇の幕は既に上がっていたのであった。

W・J・ホルムズ著「太平洋暗号戦史」満洲からフィリピンに輸送された日本陸軍の諸師団は、輸送途中、多数の死者を出した。第二十三歩兵師団がその一例である。……暗号電報の解説により……

東支那海の北端でこの船団を待ち伏せるよう、二群の狼群潜水艦部隊を配置した。当時、米軍は三隻一群の狼群戦法を採っており、「米海軍潜水艦史」に依れば、この二群はクイーンフィッシュ、バブ、ピキューダと、スピードフィッシュ、サンフィッシュ、ピートの各群であった。

「あきつ丸」被雷す

昼少し前、護衛艦は敵潜を探知し、船団司令官は直ちに對潜警報を発令したが、時既に遅し。一時五八分、クイーンフィッシュの放った魚雷二本は「あきつ丸」に命中し、船は直ぐに傾いて沈んで行った。全没まで三、四分であろうか、陸軍特殊船は、大、小発に兵員・車両などを乗

せたまま船尾から乏水出来るようになっていた為、隔壁が少ない。海水は急速に船内を満たした。歩六四聯隊長中井中佐以下、第一、第二大隊の大部ほか諸部隊、船砲隊、それに多数の少年兵が戦死した。私の戦隊も約半数を失ったが、戦死者は約二、二五〇名と推定される。沈没地点北緯三三度一七分、東経一二八度一分

船団は敵潜の掃討と兵員の救助に「大東」「昭南」の二隻を残し、他は、爆雷を投下し乍ら朝鮮南岸を目指した。十六日未明、巨文島泊地、同日夕、珍島東側錨地に移動、と記録にある。

（駒宮真七郎氏「戦時輸送船団史」より）私は十五日夕刻、海防艦「大東」に救助されて、翌十六日、僚船「神州丸」に移乗したが、同期の秋元少尉が護り抜いた歩六四の軍旗も一緒であった。（秋元とは漂流中泳ぎ着いた筏で一緒になった）

「摩耶山丸」被雷す。

船団は十七日朝、珍島錨地を出航、舟山列島に向かったが夕刻までは異常なく、薄暮となって哨戒機が着艦し始めた一八時一五分頃、「摩耶山丸」が被雷した。ピキューダの魚雷二発により船体は瞬時に横転沈没した。私はその時「神州丸」の船内にいたが、報を聞いて上甲板に駆け上がった時は、「摩耶山丸」のいた辺



りに唯黒煙が残っている許りであった。師団長西山中将は奇跡的に救助されたが、参謀長村田大佐以下各部長など司令部は壊滅した。野砲一七、工兵二三の各大、中隊ほか諸部隊、船砲隊、少年兵など死者は約三、二〇〇名を数える。沈没地点北緯三三度二一分、東経一二四度四二分

### 空母「神鷹」被雷す

次いで五時間後の二三〇九頃、追尾していたスピードフィッシュの魚雷は「神鷹」に命中した。流れ出した航空ガソリンで船体は猛火に包まれ、水深三十五米の海底に艦尾を着けた「神鷹」は、周囲の海面を明々と照らし乍ら、何時までも炎え続けた。「対馬」艦長鈴木中佐の手記によれば、救助されたのは乗員一、一三〇名の内七〇名とある。

### 沈没地点北緯三二度五九分 東経一二三度三八分

上甲板に出た私は、この時、浮上敵潜と船団各艦船との撃ち合いを目撃している。嘗められたものである。飛び交う曳光弾、乱れ飛ぶ黒雲の狭間に仰ぎ見る月は、凄惨そのものを感じた。各船は指令に基づき北上して浅面を目指したが「神州丸」は船長の独断で二〇ノットを越す優速にものをいわせ、一路四礁錨地に突っ走っている。単独行動に出たらしい

とは察していたが、錨地で長い長い待ち時間ののち各船の姿を見るまでは、残ったのは「神州丸」だけかと思っていた。半減して「吉備津」「神州」の二隻

となった旭の主力(第一梯団)は、上海で兵力の補充を大本营に要請したが容れられず、二十一日、大陸沿岸沿いに航路を取り、二十五日石油船団と分離して、「大東」「対馬」の護衛の下、二十六日高雄に着いた。増強された七隻(船団史に依る)の護衛艦に護られて高雄を出たのは三十日、北サン(フェルナンド)に着いたのは翌十二月二日であった。そして一ヶ月後には、兵員、武器、弾薬の補充も思うに任せぬまま、リンガエンに米軍を迎え撃つこととなる。

### ミ二七船団壊滅す

これより先、十七日二二〇〇以降翌十八日早朝にかけて後続していたミ二七船団も敵潜の猛攻を受けた。この船団は、ヒ八一に遅れること二日の十五日に門司を発った。同じく比島向けの低速船団で、出港時十隻、途中うち二隻が故障で引き返し、この時は八隻に減っていたが、ヒ八一が「あきつ丸」の沈没で朝鮮に一時待避した為、恰もヒ八一の後を追う格好になっていた。敵潜が見逃す筈がない。「盛祥丸」が北緯三三度三五分、東経一

二四度三四分の地点で、「江戸川丸」「逢坂山丸」「鎮海丸」が何れも北緯三三度三〇分、東経一二四度三〇分の地点で被雷沈没した。何れも四千屯から七千屯の船である。

人員の損害は、「江戸川丸」船砲隊長であった鈴木大尉の手記によれば、「江戸川丸」が二、二一六名中、救助されたのが一八五名、他は救助された人員のみしか判らぬが、「盛祥」六八名、「逢坂山丸」一四名、「鎮海」六八名である。

尚、この船団には挺進十九戦隊と、後発となっていた十八戦隊の第三中隊(長久保少尉)が乗っていたが、十九戦隊は、この時戦隊長以下四名を失い、残り五〇名をバシー海峡で失って全滅した。久保少尉以下の十八戦隊の生き残りは、二十戦隊に編入され後日台湾で私たちと合流したが、先発の本部、中隊はバシーで海没し、比島に着いたのは戦隊長以下僅かに二〇名であった。襲撃した敵潜は「江戸川」と「盛祥」をサンフィッシュ、「逢坂山」と「鎮海」がピートである。他に「阿波川丸」も中破し、結局高雄に着いたのは二隻のみである。

### 慟哭の海

正しく「米海軍潜水艦史」上、また「暗号戦史」上特筆さるべき戦果であつ

たろう。十五日と十七日の両三日で、計

七隻、トン数にして六三、五一二屯を沈め、一万を越す兵員を失わせたのである。而も船団情報により配置した、二群六隻の網に掛かった獲物であった。雄凶空しく途上に散った陸海将兵、また船員の方々の御無念は如何許りか、今は唯、御冥福を衷心からお祈りするばかりである。

「船舶喪失一覧表」に依れば、昭和十九年十月の船舶喪失量は、隻数一三〇隻、総トン数三八〇、一三〇屯、十一月は一〇四隻、四〇九、八九三屯となっている。十二月は前月の半分以下に減少しているが、「この低下の原因は、フィリピン群島を巡る過去三ヶ月の激烈な作戦が先月末を以て一段落を示した為である。しかし、これは次期作戦に移行する空白時であつて、亦同時に日本海軍の南方制海権の完全喪失を物語るものであつた。」と述べている。

所謂「太平洋戦争」で、終戦までに喪失した船舶は、実に二、四〇〇隻余、八〇〇万総屯に上る。将兵、武器弾薬、軍需品、資源の喪失も亦膨大な数字を示すであろう。そして、これは亦敗戦の重要な原因であつた。

確かソロモンで戦死された弟さんを偲ばれた歌であつたが、私はこう詠み替えて口ずさむ。

墓標もなき千尋の海底に眠る戦友達に鎮魂の思いを込めて……

南(みんなみ)に  
続くこの海 風(なぎ) 渡る  
鷗(かもめ)となりて  
帰れ戦友(とも)等よ

(附記)「神州丸」に収容された私以下十二名と「吉備津丸」に収容されていた戦隊員二十名、合計三十二名は高雄で第四海挺基地本部の指令下に入った。

戦隊長以下二十三名は、海没翌日佐世保などから来た艦艇に救助され、五島、佐世保を経て、訓練基地があつた幸ノ浦に帰り、別行動で幸ノ浦に帰っていた十八戦隊の久保少尉(同期)以下十七名を第二十戦隊に吸収し共に、二十年二月に來台したのであつた。

臨時に編成された基地大隊の手で、台湾中部・嘉義西方に設けられた基地に展開したのは、三月六日、直ぐ訓練に入った。

一度「敵船団見ゆ」との報で甲号配備が下令され、出撃を準備したが間もなく誤報と判り、以後終に出撃の機を得る事

なく終戦を迎えた。先発していた第二十二基地大隊を初め、比島に散華した各戦隊、基地大隊の諸兄に改めてその御冥福を祈る。

(平成二十二年五月 逝去)

第二二戦隊及び基地第二二大隊戦闘経過

会 員 中溝 二郎

海上挺進第二二戦隊は通称暁第一九七六〇部隊で、現役下士官の志願者を主体とし、戦隊長は陸士五四期の林仁大尉で、中隊長は第一中隊長江頭二郎中尉、第二中隊長中田九十郎中尉(何れも陸士五六期)、第三中隊長渡辺正夫少尉(幹候一期)、副官は高野富雄見習士官(幹候一期) 二期(二〇年一月少尉)で、群長は幹候一期の見習士官、隊員は現役下士官であつた。

戦隊は昭和一九年十月十五日、宇品で正式に編成を完了し、幸ノ浦基地で一ヶ月余り訓練の後(この幸ノ浦での夜間訓練中、イ号潜水艦の突然の浮上による接触事故があり、このため佐々木茂中尉(陸士五六期)以下十三名の隊員が事故死するという事件があつた。)十一月二十七日に宇品を出航し、鹿児島に回航、十二月九日に同港を出発し、同港出航と同時に第十方面軍(台湾軍)に編入となつ

た。

た。

た。

た。

た。

た。

の記事で読んだあるご遺族の詠進歌を思

た。

た。

た。

同月十二日に那覇港沖に仮泊し、更に十五日に石垣島沖に仮泊した後、二十二日に台湾の基隆港に上陸、三十一日に設営地である高雄州潮州郡枋山庄獅子頭に着き、同日から翌二十年五月まで、同地で訓練並びに待機と防備に当たった。

この間、三月十六日の夜間高雄沖にて演習の際、急激に天候が悪化して時化となったので、急遽演習を中止して基地に帰ったが、第一中隊長の江頭二郎中尉を始めたとして、見習士官二名及び下士官二名計五名が未帰還となった。

このため補充要員として、比島進出が不能のまま、台湾軍に編入された第五戦隊から六名を受け入れ、その他同様に比島に渡れず台湾残留となっていた第七戦隊員三名、第九戦隊員一名、第一六戦隊員一名がこの前後に、この戦隊の補充とされた。

二十年五月九日、台北州七星郡汐止街汐止(台北と基隆間の淡水河沿いにある)に移駐の命令を受けて、獅子頭を出発し、陸路經由で十一日に汐止に着き、敗戦時まで同地に在った。

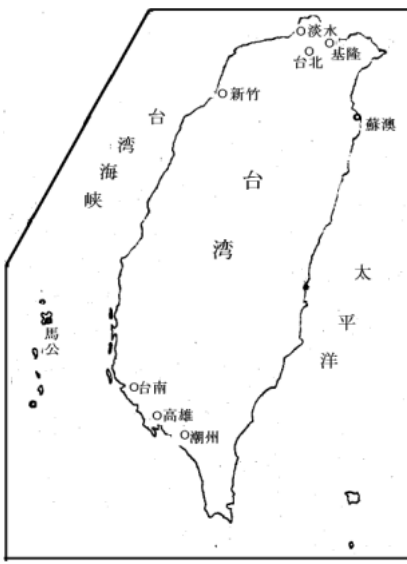
又、先に沖縄の慶良間列島から宮古島に移動予定で出航した第四戦隊の一コ中隊(赤星少尉以下二一名)が台湾に漂着

したまま宮古島に渡航できず、独立中隊として基隆の東部に配備されていたが、終戦時そのうちの一部を受け入れた。

前記の状況で、昭和二十年台湾に着いてからの戦死は、前記の五名を含めて将校三名、下士官十名の合計十三名であった。

(このうち、二十年六月十五日、沖縄本島の島尻郡八重瀬岳での戦死一名と二十一年一月に戦病死一名がある。)

海上挺進基地第二一大隊は、暁第五七六八部隊と称し、昭和十九年九月十一日に、名古屋の騎兵第三連隊の補充隊と歩兵第六連隊で編成を行ない、大隊長は木元和四大尉であった。



十月一日に名古屋市守山港を出発して、八日に門司に着き、同日輸送船に乗船し

て翌九日三池港に寄港十日から十八日まで佐世保港に、その後、更に唐津湾に仮泊して、二十日に朝鮮の麗水付近の湾内に仮泊の後、大陸沿岸を南下して、二十日に中国の杭州湾外の舟山列島付近に仮泊、二十三日に同地を出て二十六日高雄港についた。

ここから三十一日に任務地である高雄州潮州郡枋山庄獅子頭に着き、以後同地で基地設営を行なっていたが昭和二十年二月に行なわれた台湾方面に対する米軍の空襲によつて、陣地のほとんどが壊滅したため、五月に台北州汐止に移駐し、同地で基地を設営し、戦隊とともに同地に在って敗戦を迎えた。

**第二三戦隊及び基地第二二大隊戦闘経過**  
会 員 中溝 二郎

海上挺進第二二戦隊は、通称号暁第一九七六一部隊と称し、戦隊長は陸士五四期の吉沢牧夫大尉で、第一中隊長は大河原宏中尉、第二中隊長は新納崇美中尉(いずれも陸士五六期)、第三中隊長は山崎基少尉(幹候九期)がおり、群長は幹候一期の見習士官、隊員は下士官を主とし、若干の下士官候補者の現役兵で編成されていた。

昭和十九年十月二十五日、宇品で戦隊

編成完了後、同日門司經由で台湾の高雄に向つて出発し、三十日に高雄に着いた。十二月一日に任務地の高雄州潮州郡七里溪に到着し、同地付近で訓練並びに作戦準備に従事していた。

この戦隊は、昭和二十年九月一日海上(基地付近の海上と推定される。)において、中隊長の大河原中尉を始め一期の幹候の見習士官(当時は少尉か?)四名を含め、三三名が海没し、ほかに九月に現地の陸軍病院で二名が病没している。このため被害は、将校五名、下士官二十三名、兵(当時は下士官か?)七名の合計三十五名で、直接戦闘をしなかつた戦隊としては、甚だ多くの損害を出している。

海上挺進基地第二大隊は、暁第五七六九部隊と称し、大隊長は特別志願将校七期の佐藤勝一大尉で、昭和十九年九月十六日に名古屋の輜重兵第三連隊補充隊として召集編成を行なつた。

十月二十六日付で台湾軍に編入となり、整備中隊を残して基地各中隊は門司を出航、二十九日に基隆に着いた。

十一月三日に高雄州七里溪に到着し、その付近で基地設営と防衛作戦の準備に従事していた。

一方、後発となつた整備中隊は、十二

月に入つて輸送船ハワイ丸に乗船、門司を出航したが、二日の夜、東径一二八度五〇分、北緯二八度五〇分の海上で、米軍の潜水艦による魚雷攻撃を受けて乗船が沈没し、中隊長丹羽大尉以下そのほとんどである五〇名が海上戦死を遂げたため、整備中隊は全滅するに至つた。

**第三戦隊及び基地第二三大隊戦闘経過**

會員 中溝 二郎

海上挺進第二三戦隊は、暁第一九七六二部隊と称し、昭和十九年十月二十五日宇品で編成を行なつた。戦隊長は陸士五四期の御厨善三郎大尉で、第一中隊長は塩田育則中尉、第二中隊長は渡辺実中尉(いずれも陸士五六期)、第三中隊長は服部善三郎少尉(幹候九期)、本部付将校は寺井西松見習士官(幹候一〇期)二十年一月少尉)であり、群長(小隊長)は仙台予備士官学校出身幹候一期の見習士官、隊員は特幹一期生が二十五名いたが、多くは現役下士官と下士官候補者の兵で編成されていた。

戦隊の編成後、幸ノ浦基地で約一ヶ月、訓練に入つていたが、十一月二十八日に輸送船大威丸で宇品を出発して門司に寄港し、三十日に門司を出て同日付で正式に台湾軍に編入され高雄に向かつた。途

中十二月二日午前四時頃米潜水艦の攻撃を受けたのでこれを退避するため奄美大島に寄港し、十二月五日に高雄に上陸した。

高雄では同市の西子湾付近で基地設定と、舟艇の訓練に当たつていた。

なおこの戦隊には、比島に向う予定とされていた第八戦隊で、台湾沖航空戦の際、空襲により乗船が沈没し舟艇の大部分を喪失したため、台湾に留まつていたうちから、石月忠夫少尉(幹候八期)以下十一名が編入されてきて、またこの戦隊の舟艇の一部を第八戦隊に配分した。戦隊の損害としては、見習士官一名と、兵一名が陸軍病院で病没している。

海上挺進基地第二三大隊は通称暁第一四一六四部隊と称し、特別現役志願将校





二期の西川菊雄大尉が大隊長となり、昭和十九年九月十七日に、大阪府高槻市で編成を行なった。

十一月になって内地を出航して高雄につき、高雄市の近郊の西子湾付近で、基地設営作業に従事し、以後戦隊とともに台湾の防備に当たっていた。

第二四戦隊及び基地第二四大隊戦闘経過

会 員 中 溝 一 郎

海上挺進第二四戦隊は、暁第一九七六三部隊と称し、昭和十九年十月二十五日字品で編成を行なった。戦隊長は陸士五四期の稲田満徳大尉で、第一中隊長は加茂信義中尉（陸士五六期）、第二中隊長は村田圭弘少尉（陸士五七期）、第三中隊長は牧野清一少尉（幹候九期）、副官は三宅一美見習士官（幹候一〇期、二〇年一月少尉）で、群長（小隊長）は二名が前橋、八名が仙台予備士官学校出身幹候一一期の見習士官、隊員は現役下士官及び乙種幹部候補生からなるものであった。

この戦隊は、他と同様に、編成後も幸ノ浦基地で約一ヶ月間訓練した後、第一陣として第二中隊と基地大隊整備中隊の一〇小隊（小隊長山田少尉）が日昌丸に乗船十一月二十五日に門司を出港し、同

日台湾軍に編入となり、三十日に無事高雄に到着。

また第二陣は十一月三十日ブラジル丸（第一中隊・戦隊本部）と江浦丸（第三中隊）及び整備中隊の主力（乗船区分不明）に分乗して門司港を出港したが十二月二日早朝、米潜水艦の攻撃を受け僚船の二隻が沈没、ブラジル丸は自衛のため投下した爆雷の炸裂で故障を来たし浸水、船は傾斜したが、海水を排水しながらその儘運行し、やっと基隆港に到着同港で船体修理後再び出港し、十二月十日頃江浦丸と相前後して高雄に到着した。

戦隊はしばらく同地にいたが、十二月十五日に任務地である高雄州岡山郡湖南庄に陣地展開を準備し、二月五日舟艇を自力航行により基地湖南庄へ移動して陣地配備を完了した。以後同地で訓練と防備に当たっていた。

五月下旬に人事異動があり、戦隊長稲田満徳大尉は第九師団参謀部付となり、六月一日第五戦隊長近藤三男大尉（陸士五三期）が第二四戦隊長を兼務し、合わせて第二四基地大隊も近藤戦隊長の指揮下に入った。

翌二十年七月十五日、第十方面軍作戦計画変更に伴う移動命令を受けた。すなわち、沖縄戦終結後の台湾北部戦備強化

のため、戦隊を新竹附近に移動し、第九師団に配属となったのである。

戦隊は命令を受けると、直ちに駐屯地湖南庄を発って陸路（輜重隊の自動車及び鉄道による）新基地に移動した。主力（戦隊本部・第二中隊・第三中隊）の新基地は新竹州竹東郡横山庄沙坑附近で、米軍の艦砲射撃を避けるため新竹海岸より約二十軒山中に入ったところであり、取り敢えず農業用灌漑用水池等を利用して舟艇を秘匿した。又、第一中隊は主力と離れて大湖郡大湖庄に配備された。同地は苗栗海岸よりやはり二十軒 山中に入ったところであった。

これらの新たな基地にて訓練に当たっていたが、又、基地より海岸までの舟艇搬出道路、海岸到着後の泛水作業地点、つづいて出撃地点等の偵察を行い、出撃時の迅速な進出を研究した。

このような作戦準備中に八月十五日の終戦を迎えた。なお、高雄港に宿泊中、一月二十一日早朝から高雄港に米軍艦上機の激しい波状攻撃（約一千機）を受けた、この時銃撃のため戦隊員七名の下士官が戦死した。他に六月にシウ湖内で一名が死亡している。

海上挺進基地第二四大隊は、暁第一四

一六五部隊と称し、二期の特別現役志願將校の平晃大尉が大隊長で昭和十九年九月十七日に大阪府堺市金岡の輜重第四連隊にて編成された。

第一中隊長は藪内増司大尉、第二中隊長は浜野新造中尉（海没戦死、以後林源蔵中尉）、第三中隊長は平松瀧男大尉、整備中隊長は生駒繁一大尉であった。

平松瀧男大尉は終戦後の八月二十九日新竹州竹東郡横山症にて自決されている。大隊長は十月二十二日、単身にて福岡雁の巢飛行場より台北飛行場に赴任し、任地において、人夫を使い基地の幹線道路を造り、基地大隊の受け入れ態勢を整うべく設営準備をされた。

大隊本部、第一中隊の工兵小隊、第二中隊及び整備中隊の一部は摩耶山丸に、その他は神州丸に乗船して、十一月十三日に門司を出航し、同日台湾軍に編入されたが、十一月十七日に摩耶山丸が東径一二四度四二分北緯三三度二一分の海上（済州島西方一二〇軒）で米潜水艦の魚雷攻撃により沈没し、浜野新造中尉以下多数の海没戦死者を出した。

（この時の船団の中には、第二〇戦隊の乗ったあきつ丸もあり、前記のように被害を出した）

救助された者と本隊主力等は十一月二十六日高雄に着き、二十八日に目的地で

ある湖南庄に到着、以後同地で基地設営を行っていたが、二十年七月移動命令により、戦隊とともに新竹州の横山庄に移駐し、ここで防衛作戦中に敗戦となった。

### 海上挺進第二四戦隊

元第一中隊小隊長 給田善之助

京都伏見の中部第三十七部隊（歩兵第一機関銃中隊へ入隊し、第十一期甲種幹部候補生として仙台陸軍予備士官学校に入隊、十九年九月十日頃「陸軍船舶司令部」への転属命令を受け、「海上挺進第二四戦隊」編成までのことは省略する。

昭和十九年十月二十五日「海上挺進第二四戦隊」が編成され、同時に見習士官に任命され、小隊長となる。部下は関東軍より抜きの現役下士官で、私より総べて年上で経歴の古いつわもので編成された。小隊長も含め九名。戦隊は戦隊長以下百四名で、中隊は三箇小隊と中隊長直轄隊員三名の三十一名の編成であった。十一月七日宇品港よりタンカー音羽山丸で門司へ転進する。下関市江ノ浦小学校（彦島）で宿泊して、舟艇受領のため

十一月三十日、第一中隊はブラジル丸（六千トン）に、第三中隊は江ノ浦丸に分乗して門司港を後にした。十一隻から

なる船団は三列縦隊で進む。海は風雨と荒波に揉まれ難破船のようだ。船中一夜が過ぎ、その夜明け、五島列島を過ぎ鹿兒島西海岸で、突然に「ボーツ、ボーツ」と暗闇の中、汽笛が鳴ると同時に、「退船準備」という声流れ船内は騒然となる。甲板に上がった途端に隣に並んでいたハワイ丸、船団の中で一番大きな船（九千トン）が船一杯の火柱、大爆発が起こり、五分後に火柱がなくなると同時に船の姿は海中の藻屑と消えていった。全員の兵隊―数千人の生命が奪われた。助ける術も無かった。

仙台の同期生も乗っている筈だと思っ

ている矢先、鈍いショックと共に自分の船が傾いてきた。船尾に穴が開いたために、海水を排除する作業をしながら運行する破目となった。その他に二隻が火災を起こしながら沈没していった。明るくなるにつれ周りには一隻の船影も無く、頼みの海防艦も何処へ行ったやら姿も見えぬ。船のスピードが極端に落ち、荒れ狂う波を乗り切れるのかと不安でたまらなかつた。天の助けか、やっと台湾北部の基隆港へ辿り着いた。船底の補修を終えて、十二月十日高雄港に着く。

※海防艦…沿岸・領海警備、船団護衛、対戦警戒を行なう小艦艇

港内や岸壁に数隻の沈没した船が船腹

を見せていた。倉庫は十月の空襲で殆どやられ、焦げた砂糖が黒い山のようになっていた。椰子の木やピンローやガジュマルの木等の南国の風物が有りながら、戦争の爪痕が明るい風景を壊していた。

対岸の緑町に舟艇を繋船して整備をし、基地の受け入れ準備が整うまで待機した。

昭和二十年一月二十一日。朝八時頃より米軍艦載機グラマンの波状攻撃を受けた。高雄港には、兵員を送り届け、比島より帰国途上の「鴨緑丸」等約六隻が停泊中のところ、いずれも被爆大破した。

グラマンの攻撃は夕方まで繰返し続いた。我が戦隊もテント生活をしており、攻撃の目標となり、下士官七名が戦死し、八名が重軽傷を受けた。十五名をそれぞれ舟艇に載せて砲火を潜り、港を横切って対岸にある陸軍病院に運んだ。この処置におおわらわであった。

その後、寿山公園の下にある西手湾に移り、身分に余る財閥の別荘が我々の宿舎となった。

二月上旬。自力航行により舟艇を高雄より北方二十五軒にある基地、高雄州湖南荘へ移動して陣地配備を完了した。台南市(安平港)の南の地である。

第一中隊三十一名は、専売公社(製塩)の烏樹林事務所の社宅に分宿することに

なつた。基地部隊は受入れ体制、宿舎と舟艇の整備、秘匿場所の設営に毎日をごしていた。海岸までは二百メートル位で砂浜の海岸と内海があり、南国特有の景色の中、快適な日々を過した。訓練は内海から外海へ出て、夜間のみ行われた。中隊単位(三十艇)である。

二十年早春、いよいよという状況が到来した。敵機動部隊がフィリピンよりバシー海峡に向つて北上中との緊迫の情報だ。来るべきものが遂に來たと緊張し、身の引き締まる思いがした。台湾の西海岸に上陸する可能性大とされる状況で、速やかに軍装を整え、身辺の整理をし、遺書等もしたため故国に送る荷造りまでした。

互いに重苦しい空気の中、敵機の飛来も無く不気味なほど静かであったが、人生で初の長い一日であった。そして北上中の敵艦隊は台湾の東海岸を通過中との情報が入り、安堵の胸を撫で下ろし、初めて笑顔が見られ、コップ酒を酌み交わした。敵はその後、硫黄島を陥落させ、

沖繩本島への攻撃を始めたのである。六月一日。戦隊長の人事異動があり、第五戦隊長近藤三男氏が着任された。

六月下旬。戦隊は新竹州へ移動となる。第一中隊(三十名)は苗栗市東方にあつ

る大湖汶水地区に基地体制を展開した。敵の艦砲射撃を避けるため、海岸線より二十キロメートル以上離れた場所へ舟艇を秘匿することになった。このために出撃前の進水場所の選定、出撃の方法等の調査や現地偵察に多忙な毎日であった。大湖の街は、人口の割に日本人の家族が疎開などで多く住んでいた。小学校の一部を借りて宿舎にしていたので、親たちとも親しくなり招かれたりして楽しい日が多かった。

しばらくしたある日、警察署長より私的に、明日重大放送があることを知らされた。翌八月十五日、終戦の玉音放送の宣言には、この後も更に戦いたいという気概と、これで戦争が終つたのでホッとした気持ち、また今後捕虜となつた場合の不安などが胸を去来した。

八月二十日。長い間の見習士官に別れを告げ、陸軍少尉に任官した。その後、新竹市周辺に基地隊も含めて約七百名が集結した。

台湾は戦場にならなかつたために、内地帰還は南方の地域の部隊が終つてから始まるので、三年後二十四年頃までは現地自活をする予定との事だった。

早速、部隊でそれぞれ計画を立て、即時に実行に移された。建築土木業、山林業

(材木の伐採等)、レンガ工場、製菓グループ、運送業、農業(二百名)、鉄工所、その他特に手職を持たない人は嘉義の製糖会社(砂糖きびの栽培など)へ派遣された。各グループ毎に生計を立てて行きながら、全体をコントロールするのは経理部で行うことになった。

私は経理部で、妙中要造(青葉隊)と俣野圭三(名取隊一当時入院中)両氏と共に担当することになった。私は金銭の出し入れを掌握する仕事であったが、比較的自由的な身で恵まれた日々を過していた。自活仕事では新竹市の駅前目貫通りの商店街の復興工事も順調に進んで、やつと工事の内金が入ったりして軌道に乗ってきた。

レンガ工場もやつと製品が焼き上がる状態になってきたが、急遽帰国が発令された。新竹の駅前工事も材木や資材も運び込んだままで引き上げることになり、レンガ工場も最初の製品が焼き上がったところで中止の止む無きとなった。

十二月十五日以降、順次基隆港へ集結し、一月末海軍の海防艦(二百五十トン)で鹿児島へ朝早く着く。上陸後、検疫を済ませて夕方の特別仕立の普通列車で郷里へ。途中で下車し家路に向う人と別れを惜しみながら又の再会を約した。汽車の窓はガラスの入ったものもあつたが、

多くは板がガラスの代わりに嵌められており、板の真中に小さなガラスが申し記程度に入つたもので車中は薄暗かつた。途中広島駅では、宇品や江田島で教育を受けた関係上、被爆の状態はどうかと気になってあたりを見回した。街の真中あたりに百貨店か? 鉄骨の残骸が見られるも、その他は何も無く、港の方までが見通すことが出来る状態には、その凄まじさにはびつくりさせられた。

「日本は負けたのだ」と心の中で繰り返し反復した。大阪駅には夜遅く到着。家に帰るのには、翌朝の一番列車まで待たねばならぬ。勿論、宿も無い。駅の前も空襲のため跡形も無く、残骸を晒すのみ。雪のちらつく大阪駅は寒かつた。ところどころで焚き火をしていたので、あたらせて貰つたらと思ひ近づくと、「兵隊さん、悪いけど『十円』貰います」とのこと、全く予想だにしない言葉が返つてきた。これが敗戦の現実である、つくづく思つた。

翌朝一番列車で、福知山経由で豊岡へ出て宮津線に乗換え網野へ。夏服に将校行李一箇と言う姿で、旧正月の日に降り積もる雪の中を我が家へ。両親も家族も皆元気であつた。

(平成十四・十・二十九記)

### 海上挺進第二四戦隊略史

元第二中隊長

村田 圭弘

戦隊長の稲田満徳は中支より、中隊長の加茂信義及び、村田圭弘は満州より昭和十九年の九月中旬に宇品の船舶司令部に出頭し江田島の幸ノ浦基地に赴任した。牧野清一は海上挺進戦隊構想の当初より①の研究、挺進戦隊の戦法等の研究のため特に選ばれた将校十八名の一員にて、昭和十九年七月中旬に広島湾内大角間島次いで小豆島、豊島にて研究を重ね、又教育の訓練指導にも当たっていた。九月中旬には同じく幸ノ浦基地に赴任した。小隊長は陸軍予備士官学校より選ばれた幹候十期(副官)及び十一期出身で同じく九月中旬に幸ノ浦基地に赴任した。

#### (小隊長名略)

隊員は内地、外地を問わず各部隊から選抜された曹長から伍長までの現役下士官及び、乙種幹部候補生で九月中旬から下旬にかけて幸ノ浦基地に赴任集結した。(海上挺進隊の発想、攻撃方法、組織、全体の配置等略)

約一ヶ月の幸ノ浦第十教育隊における訓練を終了して、昭和十九年十月二十五日宇品で正式に海上挺進第二四戦隊が編成された。

十一月七日に戦隊全員が宇品より音羽



山丸(タンカー)に乗船出発し、八日に門司に到着した。門司では対岸にある彦島の江の浦小学校に分宿待機した。

④は既に門司に到着しており、爆雷も含めて門司輸送司令部より正式に受領した。更に、同司令部より乗船区分、乗船月日を命令された。

任地赴任の第一陣として、第二中隊と基地大隊整備中隊の一個小隊(長 山田整備少尉)が十一月二十五日日昌丸にて門司を出航した。

乗船したところ、起居の場所を糧秣庫に割り当てられてどうすることも出来ず、輸送副官に交渉するも変更を認められずやむを得ず搭載した④の下で起居した。

同日付けにて第十方面軍隷下に編入され、第十方面軍直轄部隊となった。

日昌丸は当初単独航行していたが、五島列島沖付近にて船団を組んだ。船団は十隻、平均十五ノットの高速船団にて、その周囲を九隻の駆逐艦、海防艦と最後に護衛航空母艦が配置して護衛され、目的地に向かった。途中海は凪いでおり平穏な航行であった。台湾が見えてからは西海岸依いに陸地を見ながら南下した。台湾から航空機による護衛もあった。十一月三十日船団は十隻無事高雄港に到着した。入港した輸送船に台湾の人が

小さな船(サンパンと呼んでいた)で群がって果物、砂糖きびなどを売りに来た。内地では見られない果物が豊富で、砂糖など甘いものがあることに驚いた。

第二陣は戦隊本部、第一中隊、第三中隊並に基地大隊整備中隊の主力で、十一月三十日ブラジル丸、江浦丸にて門司を出航し、同日付けにて第十方面軍に編入され方面軍直轄部隊となった。

九州西方海上にて船団(十二隻)が編成され、南下中十二月一日未明五島列島沖にて米潜水艦の攻撃を受けた。船団は甚大な被害を受けて沈没する船舶数隻に及び残った船は散々になって単独航行した。その際ブラジル丸は隣船ハワイ丸轟

沈の破片を左船腹に受け、破壊された穴から海水が機関室付近に浸水し船体が左舷に大きく傾斜して一時は沈没の危機に瀕したが、ポンプによる排水はもろること、乗船していた全員が水を入れる

あらゆる容器を使い、昼夜を問わず排水作業を行い辛うじて沈没を免れた。十二月五日台湾北部の基隆港に到着することが出来た。その後三日間同港に於いて船腹の修理を実施した後台湾西岸に沿い南下し、十二月十日頃江浦丸と相前後して高雄港に到着した。高雄では第二中隊が出迎えて無事を祝った。

戦隊の④は高雄市街の対岸緑町に集めてその整備を行った。

台湾における各基地大隊を統括する第四海上挺進基地隊本部も当時ここに設けられ、基地隊長高良 中少佐が基地大隊を掌握指揮をされており、戦隊も高良少佐の区処を受けていた。

なお西子湾には二十三戦隊が基地大隊と共に配備されていて、日夜訓練に励んでいた。

海上挺進基地第二十四大隊の主力は十一月二十六日高雄港に到着し、二十八日には高雄州岡山郡湖南庄の任地に入り、懸命に基地設営作業を進めていた。

十二月二十五日戦隊は湖南庄の任地に展開し、訓練準備を始めた。

昭和二十年を迎え、戦隊は高雄西子湾に戻り、舟艇の整備を行うと共に、④を、海路湖南庄に移動すべく準備を進めた。

一月二十一日早朝より各中隊は緑町において舟艇整備中、午前十一時頃に米軍艦上機の攻撃を受け、機銃弾及び、二五〇kg爆弾を浴びて戦隊員七名の戦死者を出すに至った。

二月三日戦隊と基地大隊とによる合同慰霊祭が厳かに行われ、参列者一同心から戦死者のご冥福を祈った。戦死者のご遺骨は、二名の隊員にいだ

かれて内地の肉親の元に帰国された。

その後、三月末日までに、三回に分けて全舟艇を高雄港より各中隊の基地に海路自力航行によって移動を完了した。

この頃より、米軍の勢力は強くなりつつあり湖南庄の基地も米軍のP-51とか双胴のロッキード等の米軍機の攻撃を受けるに至った。

又、海軍の震洋艇隊と合同研究、演習を行った。

戦隊長の稲田満徳は五月下旬に第九師団参謀部付を命ぜられ、六月一日付けを以て第五戦隊長近藤三男(五十三期)が第二十四戦隊長並びに第二十四基地大隊長兼務の発令があった。

この時期に第十方面軍は作戦の一部を変更する方針となり、第二十四戦隊も防備地区の変更があった。六月中旬近藤戦隊長と加茂第一中隊長は台北の第十方面軍に出頭して、新基地に関する報告を行い、又指示を受けた。

六月十五日に、戦隊員が一名シウ湖にて戦死し、基地内で慰霊祭を行った。

七月十五日第十方面軍作戦計画変更に伴う移動命令を受けた。

戦隊は沖縄戦終結後の台湾北部戦備強化のため、新竹付近に移動し第九師団に配属することとなった。

湖南庄における①秘匿壕を完成し、泛

水路を確保し、官舎についても完成しつつあった基地を撤収することになった。

基地大隊も同じく移動命令を受けて、主力は新竹州東部横山庄に、基地大隊第一中隊は新竹州大湘郡大湘庄に入り、新基地設営に入り、戦隊の受け入れ態勢を急いだ。

戦隊は命令を受けると、直ちに基地撤収を行い中隊毎に②を早朝より塩田水路を利用して、岡山大橋付近の池に集結してその日のうちに輜重部隊の貨物自動車によって駅にピストン輸送し順次貨車に積載し、その日の真夜中に出発した。

翌日早朝に主力は新竹駅に到着し待機していた第九師団輜重部隊によってそれぞれの新基地に移動した。

主力の新基地は竹東郡横山庄沙坑付近で新竹海岸より二十km山中に入ったところにあり、取り敢えず農業用灌漑用水池などに③を浮かべて囲いを作り秘匿しつつ、基地大隊は山や岡を掘って④を入れる秘匿壕建設作業を進めていた。

第一中隊は戦隊主力と別れて、基地第一中隊が設営した大湖郡大湖庄に配備された。同地は苗栗海岸より二十km山中に入ったところにあった。

戦隊長は第五戦隊、第二十四戦隊、同基地大隊、第二十五基地大隊の一ヶ中隊を統括して、秘匿名を近藤部隊と称し、

同地に部隊本部を設置した。

横山庄及び大湖庄における戦隊は米軍上陸時に敵艦船撃滅のための出撃にそなえて鋭意作戦準備を推進していた。即ち、各基地から海岸までの⑤搬出道路、海岸到着後の進水作業地点・続いて出撃地点等の偵察のため、小隊長を長として、隊員二〜三名の班を編制して各中隊位置より出撃位置まで徒歩により調査を重ね、迅速に進出できるよう研究を重ねた。

⑥の乗員は一名であったが、二名乗艇という方針が出された。又、⑦海上航行の装備強化のため、羅針盤が新たに方面軍より支給された。

右のような作戦準備中に八月十五日の終戦を迎えるに至ったのである。

(参考)

台湾に配置された戦隊の当初配置先

第五戦隊 台南州 仁徳庄

第八戦隊 (第一中隊欠)

高雄市凹子底

第二十戦隊 台南州港・

第二十一戦隊 高雄州枋山庄

第二十二戦隊 潮州郡七里溪

第二十三戦隊 高雄市府近

第二十四戦隊 高雄州湖南庄

第二十五戦隊 台南州仁徳庄

第二五戦隊及び基地第二五大隊戦闘経過

会 員 中 溝 一 郎

海上挺進第二五戦隊は、暁第一九七六四部隊と称し、昭和十九年十月二十五日宇品で編成され、戦隊長は陸士五二期の多々良武敏(現姓西村)大尉(十二月少佐になる)で、第一中隊長は佐藤瑞中尉(陸士五六期)、第二中隊長は土門正治(現姓伊藤三右工門)少尉(幹候九期)、第三中隊長は小林誠(現姓村治)少尉(陸士五七期)、副官は松嶋勲見習士官(幹候一〇期二十年一月少尉)、群長はいずれも熊本予備士官学校出身幹候一期の見習士官、隊員は現役下士官を主体とし、若干の乙種幹部候補生が加わっていた。

編成後も幸ノ浦基地で訓練を行なった後、第一次と第二次に別れ台湾に向かった。この戦隊は他の戦隊と違って機帆船で輸送したため宇品出発から任地到着まで約二ヶ月を要した。即ち、第一次は第一中隊及び第二中隊第三群で機帆船六隻に分乗して十一月二十一日宇品を出航、途中愛媛県三机、宮崎県宮野浦、細島、油津、鹿児島県内之浦、山川の各港を経由、奄美大島の名瀬、古仁屋を経て十二月二十日前後に各船分散して沖縄県那覇

港に到着、これより二十年一月三日頃宮古島、石垣島、西表島、与那国島を経由して、一月十九、二十日に前後して台湾の宜蘭蘇澳港に到着した。ここより鉄道輸送にて台北を経由一月二十五日台南州新豊郡仁徳庄大甲に到着、本隊の到着を待った。

第二次の戦隊本部、第二中隊の第一・第二群及び第三中隊は機帆船十二隻に分乗十一月二十七日宇品を出発、同日台湾軍(第一〇方面軍・司令官安藤利吉大将)に編入となった。

途中山口県上関港、佐賀関、細島、油津、山川、枕崎、を経由十二月二十一日奄美大島名瀬港、古仁屋港、徳之島龜徳港、一月七日沖縄本島運天港より一月八日那覇港に到着。一月十六日那覇港発、久米島、石垣島を経由西表島を経由二月一日一部は台湾蘇澳港に入港したが、黒潮に流されて遅れた船団が、B-24の銃撃並びに焼夷弾攻撃をうけ、戦死一名、負傷四名の犠牲者を出した。

二月七日、先発隊と同様鉄道輸送にて同港を発つて八日に大甲に到着。戦隊は二層行溪支流の岸に横濠を掘り①をそこに秘匿して、②の整備・訓練(海上での夜間訓練)等を行っていた。

基地の近くに海軍の台南航空隊飛行場

があり、米機の銃爆撃が次第に激化してきた。飛行場攻撃の帰途にはきまつて戦隊の基地上空を超低空で機銃掃射を加えて行ったが、戦隊の人員、③、器材等に被害はなかった。

その後作戦計画の変更により基地を奥地に移転する事になり、新基地を台南市の北を流れる曾文溪という河の上流、台南州層文郡大内庄大内に決定され、七月より移動開始、八月五日頃移動完了、ここで訓練中に敗戦となった。

同戦隊の被害としては、前記の米機の銃撃により下士官一名が戦死した。

海上挺進基地第二五大隊は、暁第一〇二七五部隊と称し、一九期少尉候補者の松本勇大尉(特幹隊第一期当時の第六中隊長)を大隊長として、昭和十九年九月十七日京都で編成を行なった。

十月二日に門司に着き、第一次く第四次に別れ第一次は二十六日に門司を出航し、同日付で台湾軍に編入され、十一月十七日大甲に到着。第二次く第四次は夫々十一月三日、十一月二二日、二九日に門司発、十一月九日、二十八日、十二月十三日大甲に到着。同地で基地設定を行なっていたが、二十年八月に、大内庄大内に移転し、同地にて基地設営中に敗戦となつた。

基地の近くに海軍の台南航空隊飛行場

思い出の記  
第二五戦隊第一中隊長 佐藤 瑞

## 1、海上挺進第二五戦隊の誕生

昭和19年9月歩兵第177連隊に在隊していた私は、師団司令部において少尉候補者教育の準備を命ぜられていたが、突然参謀部に呼び出され、補陸軍船舶司令部付の命令を受けた。

命令の内容については何の説明も無かったが、繰り返し言われた事は一刻を争って赴任せよとの言葉であった。

理由や根拠も無いが、頭の中にひらめいたのは「特攻」だなという二字だった。急いで原隊に復帰し、船舶司令部に着したのはその3、4日後頃であった。

広島島の船舶司令部において申告し、「幸ノ浦の第一〇教育隊に赴き齊藤少佐の指示に従え。」という指示を受けた。

幸ノ浦には既に戦隊長が着任して居られ、土門少尉が従前からの④教官として在隊していた。それから2、3日経って小隊長諸君（厳密に云えば当時は未だ小隊長要員）が、更に2、3日後には下士官諸君が続々と集結し、第一〇教育隊（齊藤少佐）に入隊し訓練を受ける事となり、104名全員が近い将来に予想される死出の旅路への旅立ちを準備する事となった。まさに俱に死すべき戦友（心

友）の出会いであった。

## 2、訓練雑感

訓練は要員全員の到着を待つて開始されたのではなく、遂次集合して来る要員から個別的に教育されていった。教育資料として支給されたのは、軍事機密と印刷された白表紙の教範型の小冊子であった。戦闘の教訓も実験的な資料もなく、此の種資料を作成された教育隊当事者の御苦労と御努力は大変であったろうと思われた。教育の実施も熱意に溢れ、我々被教育者に与えた精神的な感作は少なかつたものがあつた様に思う。

訓練の手順としては先づ個人の操艇法から始まり、次いで班、小隊、中隊の部隊訓練と進んでいったが、訓練の最終段階は中隊単位をもつてする長距離機動の後には敵船を襲撃する総合訓練であった。又訓練末期に再三行なわれた兵棋研究も仲々熱のこもつたものであつた。訓練用舟艇は、あわただしい創隊早々の訓練資材を偲ばせるもので、搭載したエンジンにその面影があつた。メーカーはトヨタあり、ニッサンあり、中には米国フォードのエンジンもあつたかと思つている。速度の調節も初期の舟艇にはトランスミッション（自動車の変速機）がそのまま装着されたものもあつた。

全ての訓練が終了した直後第二五挺進

戦隊の編成が下令され、我が戦隊は台湾軍へ編入され台湾への移動を待機する事となった。

今回の編成で創立された戦隊は、第一乃至第三〇の20個部隊であつたが、その配置は第一乃至第二〇の10個戦隊が比島へ、第二乃至第二五戦隊が台湾に、第二六戦隊乃至第三〇戦隊が沖縄にというものであつた。以上各隊の任地への移送船の入港を鶴首して待機して居た。

第二四戦隊までの輸送は比較的順調に行なわれたが、愈々我が戦隊の順番であるという頃から輸送船の入港がパツタリと途絶えてしまった。

ヤキモキし乍らイライラの日々を送つていた或る日（11月15日頃）、「戦隊は機帆船に乗船し至急任地に前進せよ」との命令を受けた。

機帆船とはどんな船なのか？それがその時頭に浮んだ第一感であつた。

元来機帆船は波の比較のおだやかな内海や、沿岸沿いの近距離輸送用に設計製造された船である。当時の話ではこの船で、1週間乃至は10日もあれば台湾に着出航してみると船足の遅い事と風浪による影響の大きい事は予想を数倍も上廻るものであつた。

### 3、台湾行の門出

船隊は先発隊と本隊とに区分されて出航する事となった。船舶司令部の努力にも拘らず所要船舶の集結が思うに任せず、取敢えずは数隻の船しか集められなかったため、それに搭載し得る兵力でも先づ派遣する意図であった。(当時台湾軍からは「一刻も早く渡台させよ」という要望があったやに聞いている)

宇品港を出発するに当り戦隊長から受けた命令の要旨は次の様なものであった。「第1中隊長は第2中隊の1コ小隊を併せ指揮し、台湾高雄に向い前進せよ、高雄到着後は軍司令部の指示により行動せよ。」というものであった。

機帆船というのは焼玉エンジン1機を装備した帆船で、航行には帆とエンジンの双方を使用して進行するものであつて、5〜6ノットの速度を持つ船と聞いており、此の速度を基準に将来の航行計画を作成していたが、航行第一日目からこの計画が如何に信用出来なかつたかという事を痛い程知らされた。当初の計画では出航1週間後には遅くとも奄美大島に着している筈であつたが、現実にはやつと鹿児島県の山川港に到着し得たに過ぎなかつた。此の様な結果になつた最大の原因は、風浪や海・潮流に対する機帆船の抵抗力が極めて脆弱であつた事である。

ここで此の機帆船について一言するが、これらの機帆船は船舶司令部の指揮下にある船舶輸送隊の一部であつて、高平中尉が指揮する比島派遣部隊の一部であり、台湾迄我々戦隊の輸送を命ぜられたものであつた。

### 4、いざ外洋へ

山川港で食糧等の積載を終え、天候も比較的安定するだろうと見定めて、12月5日早朝(早朝というよりも夜中といった方がよい)2、3時頃だつたと思つた。出発と決め、12月4日の夜は全員上陸して内地との別れを惜しむとともに、改めて死地行への心構えを固めた。

山川港を出航したら奄美大島(名瀬港)まで一気に航行する計画であつた。従来沿岸航行と違つて二夜三日で外洋を航進するものであり、何のトラブルも無く大島に到着し得るとは思えなかつた。下手をすると何隻かの機帆船が沈没する不運に逢う事も覚悟していた。出発に際して下達した命令にも次の様に述べたのを憶えて居る。

「今後の航行に当たつては、不測の事態に遭遇して船団に損害を生じ、僅か1隻にならうとも万難を排して台湾に前進し、所期の任務を全うすべし。」  
12月5日の夜が明けた。海は波おだやかに風も順風で順調に航進を続けている。

しかし見渡す限りの視界には僅か2隻の船影しか無かつた。

名瀬港に入港したのは翌7日の午前であつた。既に入港していた僚船は1隻のみ。他の船の行方は一切不明。早速捜索員を上陸させ情報を収集させた結果、大島の北岸で1隻が故障しているのが判明した。その後逐次入港して来る船もあり、全船についての情報を確認し得る迄には2〜3日ほど費した。又此の間2件の不慮の事故に見舞われた。1件は船員の作業中の事故死であり、もう1件は座礁事故であつた。高平中尉と相談した結果、島の北岸で故障(スクリュー破損)した船を修理するとともに、座礁船は代替船と交換して前進を続行する事とした。

12月16日那覇港に入港した。名瀬港を出港してから此処へ到着する迄の間、決して平穩無事だつた訳ではないが、爾後の航行に支障を来す様なトラブルもなく到着し得たのは幸運な事であつた。

当時那覇は第9師団の台湾移動業務でござつたがえしていた。敵の空襲も連日行なわれ、那覇首里周辺は一面の焼野原と化して居た。  
宇品出港以来敵機にまみえたのは此の時が最初であつたが、第一感として感じたのは、厄介な敵が一つ増えたなという想いであつた。宇品から那覇迄の航海を



はばむものと云えば風浪・海流等の天候気象のみであり、運航の経験を重ねるに従ってこれらに対する対応の方法も次第に上達して来たが、新たに出現して来た敵機に対しては如何に対応したら良いのか、まさに頭痛の種であった。色々と考えてみたが、対空火器一挺も持たぬ我々として隠密行動に徹する以外によい方法が浮かばなかった。

これ迄は出来る限り避けて来た夜間航行及び適当な荒天時の航行も積極的に行うべく覚悟を定めた。(夜間及び天候不良ならば敵飛行機の飛来も無いか又は少なくなるであろうという判断であった。)

12月27日の夕刻那覇港を出港して宮古島に向った。出港当初から何となく怪しかった天候も次第に荒天となり慶良間列島沖を通過する頃は本格的な嵐となり、船が横にゆれる度に帆柱が反対側の波頭に当たってはね返され、時々空転するスクリーン音が不気味に響いてくる。止むを得ず一時慶良間湾に避難した。

当時慶良間湾には第一乃至第四戦隊が展開していた。

翌朝嵐の静まるのを待つて航行を続行し、29日無事宮古島に到着した。

同島で昭和20年の元旦を迎えた我々は、各機帆船のマストに松の小枝を結びささ

やかな正月の祝いの印とし、全員を集合させて遙か東京に向い遥拝をした。

1月3日最後の寄港地と予定していた石垣島に向い前進した。石垣島を最後の寄港地と予定した理由は次の二つである。  
1. 宇品港を出港する時に1週間乃至10日と予定していた航海日数を大幅に超過し、戦況も日を追って緊迫の度を深めつつある。

2. 台湾に近づくに従い、敵機(グラマン、ロッキードP-38)の出現が日増に多くなり、不用意に寄港が多く、長くなれば敵機の攻撃を受けるおそれが多くなる。

1月5日予定通り石垣島に到着し、1週間分の糧食を積み込み、翌6日同港を出港し一路台湾に向い前進した。ところが、ままならぬは天候の変化で、同日夜半から嵐に見舞われ、7日朝予定外に西表島(舟浮港)に入港した。1日、2日と天候の回復を待っていたが、手持の糧食が底をつき、一隻を石垣島に引き返させ糧食を受領させた事もあった。天候の回復は完全に無かったが、1月17日意を決して台湾に向い前進した。

途中初めて敵機(グラマン)の攻撃を受けたが、幸いにも被害もなく19日午前蘇澳(すおう)港に入港した、待望久し

かった台湾への到着である。

## 5、決断

蘇澳に到着して今迄の重圧からやっと解放されたと喜んだのも束の間、爾後の高雄港行きを考えると憂うつにならざるを得なかった。高雄港に入港する為には台湾の東岸を南下してガラッピを迂回北上する必要があったが、台湾東岸地帯は風浪が荒く潮流も速く、加えて港が極めて少ない。更には敵機の来襲も頻繁で高雄迄の安全な航行などは望むべくもなかった。そこで出来る事なら蘇澳で舟艇を揚陸し、鉄道を利用して任地(台南々部)に前進するのが最善と考え、蘇澳での揚陸方法を検討することとした。

港口付近は平坦であるが貧弱な栈橋があるに過ぎない。港の中央部からやや北寄りの所に砂糖積み出し用の鉄道がありチェンブロックも装備されていた。早速当該作業所の所長に面会して施設の借用を申し入れるとともに、奥長、日高の両君を軍司令部に派遣して先遣隊の状況を報告し、高雄行きの困難性を説明するとともに、舟艇を蘇澳で揚陸するよう意見を具申しした。

軍司令部は即刻意見具申を採用するとともに、次の様な措置を採った。

1. 台湾全域に分散していた舟艇輸送可

能な鉄道貨物車(千キ)を即刻蘇澳駅に回送

2. 揚陸作業間の警備及び秘密保持のため憲兵を派遣

3. 軍司令部との連絡者(曹長)の派遣  
舟艇の揚陸作業は1月21日から開始され21日には終了する予定であったが、20日の午後予想外に強風が吹き始め、途中中止するの止むなきに至った。

海上から吊り上げた舟艇は先ずトロッコに設置した船台に乗せ、トロッコを鐵路とトロッコ線路の交わる地点まで移動させ、再びチェンブロックを使用して貨車に積み換えるものであった。

20日午後から荒れ始めた天候は21日午後には回復してきたが、一方輸送貨車の集結は予想以上に遅れ、全舟艇の揚陸、貨車積載が終了し出発し得る態勢が整ったのは24日の午後であった。24日午後蘇澳駅を後にして台北に向かった。

## 6. 基地への到着と日々の生活

### 一. 長い移動の終点

1月25日夕暮時無事車路軒駅(台南の南側)に到着した。此処に大きな製糖工場の在る所で、周辺一帯は砂糖黍畑が広がり、車路軒駅の鉄道に接続して軽便鉄道の線路が網目のように広がっていた。車路に到着した我々は、舟艇搭載の貨車を軽便線路に乗り入れ、舟艇の卸下地点

に向かった。卸下地点は線路と小川(二層行溪河の支流)の交差する所である。現場には基地大隊の隊員が卸下準備を完了して待機して居た。(卸下要領は事前に基地大隊に連絡済み。舟艇を泛水するために小川入り込んだが、一月という冬の季節に拘らず、水の温さに驚いた。予め準備された舟艇壕に全舟艇を収納し得たのは夜も明け染める頃だったと思う。

### 二. 訓練雑感

舟艇は次のような要領で秘匿した。移動の後始末も終り愈々現地での訓練がはじまった。訓練種目は各状況下に於ける機動訓練が主体で、訓練は夜間訓練に限定していた。訓練を開始してから色々な問題が起きてきた。

第一の問題は基地を出航した以後命令指示伝達の手段がない事であった。幸ノ浦時代は懐中電灯を持って最小限意思伝達を行っていたが、ここ台湾では予想外に波高が高く、この光信号も舟艇の上下に伴ない波間に消えかくれして所期の効果を果し得なかつた。

第二の問題は波高が高いため水しぶきを被る事が多く、水しぶきに見舞われたエンジンが突然故障を起し停止してしまふ事であった。

第三の問題は海岸(砂浜)に打ち寄せらる波によって二層行溪河口の水深が大き

く変化することである。これがため、海に出るに当っては予め竹竿で水路を標示しておいたが帰還するときにはその水路が大きく変わって何の役にも立たなくなつてしまふことである。

第四の問題は潮の干満による航行妨害である。前述した様に舟艇基地は二層行溪河の支流にあつたが、潮の干満はここまで及び干潮時には舟底が川底に接触する程であつた。そこでこれが対策として川の中途に三ヶ所の水門を作り干満の影響を緩和する手段をとつた。

満潮時に第1水門を閉じ干潮時には第3水門を閉じて第1と第3水門間の水位を一定に保とうとしたものである。

第五の問題は舟艇の夜光虫航跡であつた。これに対しては何の対策もなく運を天に任す以外に術がなかつた。

## 7. 部隊の一部改編

基地到着後、突然基地大隊長が軍司令部に転属し、戦隊長が基地大隊の各隊を指揮することとなつた。云うなれば戦隊長が基地大隊を併せ指揮する事となつたのである。何故その様な措置が執られたのか、そのいきさつや理由については不明である。

もう一つの改編は基地隊の舟艇整備要員の戦隊への転属である。これは海上における舟艇(エンジン)整備能力の向上

を凶った処置であった様に思う。我々が予想した将来の戦場（敵の上陸泊地）は風浪が強く、波を被って故障するエンジンが多かったためこのトラブルを排除する能力の増強が必要であった。

### 8、緊張の高まり

基地到着の当初は敵機の銃爆撃もなく比較的のんびりと暮して居た。体育競技会、相撲大会、演芸会等を催したのも此の頃であった。

時日の経過に従い敵機の飛来も増えて来たが、当初は台南や都市の爆撃を行なうため基地上空を通過するだけであったが、基地が襲撃の目標になる事も増えて来た。（此の頃になって我々の正体が敵の知るところになって居たのかも知れない。）

戦局も次第に緊迫の度を加え、2月の硫黄島陥落後、次の来攻が台湾に指向されるという予想の下に我々にも出撃準備が下令された。出撃準備上最大の問題は隊員個々の心（覚悟）に係る問題であった。

### 9、基地の移転

3月下旬米軍は沖縄に来攻した。当面台湾に対して来攻する公算は無くなったが、今後の戦局の推移によっては、いつ、我々の出番がやって来るのか解らない。ホッと一息などとのんびりする訳にはいかない。速やかに不備を是正し攻撃態勢

を整備強化する必要があったが、6月下旬突然基地移転の案がもちあがった。

### 10 曾文郡大内庄大内基地への移転

大内基地への移転が決定されたのは6月頃であったと思う。

陸上移転にはトラックに舟艇を搭載するのが可能であったので、大内基地まで、トラック輸送を行った。

泛水地点を決定する為には、二層行溪河、曾文溪の河岸に適地を選ぶための偵察を数度となく行うとともに、直接海上に泛水する方法を検討するため、旧基地付近から台南北部の安平付近までの海岸線の踏査を行なったが、決論として決定されたのは先づ河川（二層行溪河であったが、曾文溪であったかは記憶にない。）に泛水し海上に航下しようとするものであった。基地移転は7月中に終了して居た。

### 11、終戦

終戦に伴ない、戦隊は輜重兵第一八連隊（第一二師団）に編入されるとともに戦隊の改編が行なわれた。

戦隊は従来の3コ中隊を1コ中隊にまとめ、各中隊は第一乃至第三小隊となった。中隊長には私が就任し、第一小隊には奥長小隊長が、第二、第三小隊長には夫々旧中隊長が就任することとなり、部隊は旧基地隊の3コ中隊と新戦隊中隊と

て4コ中隊編成となった。

### 12、さらば台湾よ

当初我々の帰還は相当長引くであろうという予想であった。

しかし、中国軍の台湾進駐が進むにつれて即刻帰還という事になり、2月25日高雄を出港し、3月2日広島大竹港に帰還し部隊を解散した。19年10月第二五戦隊の編成から1年半後の事である。

### 13、最後に

終戦以来45年（平成2年現在）。日本は幾多の変遷を経て、世界有数な経済大国に成長した。その結果経済万能、経済最優先の風潮が各分野に浸透し、様々な弊害をもたらしている。

又、敗戦の反動から国民の国防意識は、分裂混乱の渦中にある。本来国防は国家存立の基本であり、党利党略によって左右されるものではない。

又靖國神社の参拝についても、何かと論議されているが、国家の発展を願い、後に続く者のある事を信じて散華していった多くの英霊は、どの様な想いで現在の日本を見ているのであろうか。

一度振れた振子は必ず元に戻る。日本の将来を信じ、英霊の冥福を祈って此の稿を終ることとする。

平成2年9月

佐藤 瑞

海軍航空

## 安蓮社特攻平和観音



安蓮社の門標



奉安されている特攻平和観音像



奉納された位牌

### 由来

昭和28年7月に、陸海軍各一体の特攻平和観音像が世田谷山観音寺に奉安され、引き続きもう一体ずつをそれぞれ縁の深い土地に奉安することになって、陸の一体は知覧町(現、南九州市知覧)に納められた。(360頁)

海の一体は、本事業に多大の貢献があった近江一郎氏(二体目の開眼供養前に急逝)が強く要望していた神奈川県三浦半島観音崎に奉安すべく計画されたが、地元の合意が得られず実現しなかった。以後観音像の消息は永らく不明であったが、平成19年5月に東京・芝・増上寺塔頭安蓮社に奉安されていることが明らかになった。

昭和21年10月25日に、当時占領軍によって旧軍人の集会が禁止されている中を旧海軍第一および第二航空艦隊司令部関係者有志二〇余名が、秘かに安蓮社に集まって神風(しんぷう)特別攻撃隊戦没者の慰霊法要を営み、神風(しんぷう)忌と名付けて以後毎年催行され、平成18年(第61回)まで、その存在を関係者以外に知られることなく続けられて幕を閉じた。

昭和30年以降神風忌に参列していた岩下邦雄元副会長によると、初参加の時に観音像は既に奉安されていたという。像の胎内には、二・五二五柱の霊名簿が奉蔵されている。観音像に並ぶ位牌は昭和27年2月に神風特攻平和観音会から奉納された。

### 所在地

〒105-0011  
東京都港区芝公園三-1-13  
安蓮社

(03-3433-0611)

写真提供 安蓮社

海軍航空

海上自衛隊

# 鹿屋航空基地史料館



## 史料館

旧海軍航空興亡の歴史と、戦後の海上自衛隊航空部隊の歩みとの中で活躍する隊員の姿を伝えるため、平成5年7月建設されたものである。特攻関係は戦死者の遺影二七柱、遺墨五〇点等が展示されている。

## 所在地

鹿児島県鹿屋市西原三丁目一番二号  
(〇九九四一四二一〇二三三)



連載山ある記14

岐阜県「恵那山」  
会員 池田 康博

5月4日、恵那山頂を目指した。恵那山は中央アルプスの最南端に位置する百名山の一つで標高は二千九十一m、島崎藤村の小説「夜明け前」にも登場する。藤村も馬籠宿から毎日眺めていたはずの山である。恵那山には登山口が4か所あるが、最も登り易いと言われる黒井沢ルートにした。中津川市川上（かおれ）にある「恵那山・ウエストン公園」から狭い林道を約10km入ったところが登山口である。朝、7時前に着いた時は、広い駐車場に先着の車が1台だけであった。

7時に標高千五百五十五mの登山口を出発。最初は材木を切出すための広い林道を歩き、やがて登山道に入る。丁度2時間で「野熊ノ池」に着いた。ここは近くに避難小屋もある休憩スポットで標高は千六百六十mである。設置されているベンチで小休止の後、池から流れ出るせせらぎを渡り先へ進んだ。ここからは、美しい唐松林と熊笹が生い茂る登山道に変わり傾斜も徐々にきつくなる。途中、このコース唯一の展望のきく場所、雪を頂く南アルプスの山並みを望むことができた。千九百mを超えると、窪地などに残雪が見られた。やがて樹林帯に入ろうとするところで、下ってくる青年と会った。この日会った最初の人物で、聞けば、頂上

まで1kmの地点まで行つたが、残雪で滑落する危険を感じたため諦めて下山するところという。



どんな状態だろうと思いつつ歩を進めていくと、はたして、トウヒなどの樹林帯に入ると登山道はまだ深い雪に埋もれていた。しかし、

枝の下がっている赤いテープを頼りに雪の上を歩き、時折、膝よりも深く踏み抜いたりして難渋しながらも登って行つたが、11時、頂上直下の水場まで10mの地点、標高二千八十m辺りまで来たところで遂に登頂を断念した。もう少しというところではあったが、頂上までの最後の百mは、更に急登となること、下山ともなればもっと危険性が増すことを考えた。果たして正しい判断だったか自問しながら下って、再び野熊ノ池のベンチに着いた時は12時35分になっていた。既に5時間半



麓から見た恵那山

も経過し空腹でもあったので、ここで大休止を兼ねて昼食を摂ることにした。13時16分に再び下山開始、登山口に戻つたのは14時50分であった。恵那山中に7時間50分、結果は残念で疲ればかりを感じて帰ろうとしたところ、驚いたことに、特別天然記念物の「ニホンカモシカ」と遭遇した。林道のすぐ上から、じつとこちらを覗つていたのである。その距離数メートル、しばらく互いに見つめ合っていたが、やがて彼？が森の奥に帰って行った。この日も鹿や猿は見かけたが、ニホンカモシカをごく間近で見たのは生まれて初めてで、お陰で少し明るい気持ちになって帰途につけた。

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● 満開の 花の梢に 君想う

淳

● 約束の やしろの杜の 木の枝に

今年も咲きし 満開の花

淳子

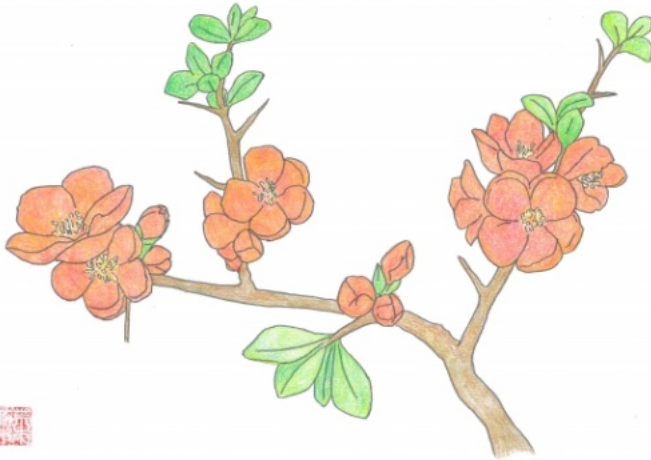
● 五月雨を 浴びて休みか 鯉のぼり

よみびとしらず

● コロナ禍で実感湧かぬ9連休

● 節電で空に輝くおおぐま座

井下駄マスオ



## 事務局からの報告等

令和三年度第一回定時理事会（3・2・16）と定時評議委員会（3・3・16）において平成2年度の事業報告及び決算が承認され内閣府に報告したので会員各位にご報告します。

### 平成2年度事業報告書

#### 一 慰霊事業

1 第41回特攻隊全戦没者慰霊祭  
平成2年3月28日（土）11時より、靖

國神社に於いて実施した。参列者は新型コロナウイルスの流行による感染拡大防止処置のため、顕彰会役員14名のみによる昇殿参拝を行い、英霊への慰霊の誠を奉げる事ができた。慰霊祭後、遊就館前に有る「特攻勇士の像」への献花を行い散会した。

#### 2 第69回特攻平和観音年次法要

9月22日（火、祝）秋分の日の午後2時より、世田谷山観音寺に於いて、新型コロナウイルスの影響のため例年行っている同寺と地元駒繫神社とによる神仏習合形式の齋行を断念し、顕彰会役員等のみの19名の参列で仏式のみで年次法要を実施した。

#### 3 各地慰霊祭への参列等

昨年度は新型コロナウイルスの影響で慰霊祭の

（時期） （慰霊祭名）

3月28日	特攻勇士之像慰霊祭
5月26日	特攻勇士之像慰霊祭
7月4日	大東亜慰霊協慰霊祭
8月15日	全国戦没者慰霊大祭
10月10日	特攻勇士之像慰霊祭
10月11日	特攻勇士之像慰霊祭
10月18日	靖國神社秋季例大祭
10月18日	秋季慰霊祭
10月31日	特攻勇士之像慰霊祭
11月23日	若潮の塔慰霊祭

（場所）

宮崎縣護國神社	石井専務理事
千葉縣護國神社	金子編集長
靖國神社	石井専務理事
靖國神社	杉山会長
長野縣護國神社	鮎田理事
茨城縣護國神社	石井専務理事
靖國神社	杉山会長
千鳥が淵墓苑	藤田理事長
埼玉縣護國神社	岩崎副理事長
香川県小豆島	高松評議員

（参列代表者）

中止や縮小が相次ぎ、これらへの参列も当初予定していた41か所に対し右の10か所にとどまったものの、一部には供花や玉串料等を奉納した。

#### 二 護國神社への「特攻勇士之像」建立奉納事業

平成2年度は、延期となっていた三重

護國神社への説明を継続し、事前調整等準備を周到にして、多くの国民が、特攻像を見ることにより、特攻隊員に対する慰霊・顕彰の気持ちを持てるような環境作り而努力する。

#### 三 募集広報

広報業務では、公益紙としての機関誌・会報「特攻」128号〜132号の5ヶ号を発行し、会員・協力団体及び希望者に配布・頒布した。また、会の名称の普及、及び、若手会員の募集を狙って自衛隊向けの広報紙等に広告を出すとともに、SNSを活用した広報のために、FBやHPの更新を行った。

#### 四 会員の動向

令和2年度における新規入会者はコロ

## 令和2年度正味財産増減計算書

令和2年1月1日から令和2年12月31日まで

(単位:円)

科 目	2年度決算	前年度決算	増 減	備 考
I 一般正味財産増減の部				
1 経常増減の部				
(1) 経常収益				
基本財産運用益	14,465,984	14,173,304	292,680	
特定資産運用益	300,000	550,000	△ 250,000	
受取会費	3,423,000	3,482,000	△ 59,000	
慰霊事業収益	1,341,000	2,254,500	△ 913,500	
出版事業収益	8,200	54,880	△ 46,680	
広報事業収益	400	10,600	△ 10,200	
受取寄付金	3,254,981	4,195,331	△ 940,350	
雑収益	1,176	342	834	
経常収益計	22,794,741	24,720,957	△ 1,926,216	
(2) 経常費用				
慰霊事業負担金	1,796,000	764,810	1,031,190	
像制作負担金	2,002,000	918,000	1,084,000	
発送等委託費	4,059,432	3,946,663	112,769	
支払助成金	2,285,900	1,989,134	296,766	
役員報酬	300,000	300,000	0	
給料手当	6,327,580	5,708,230	619,350	
福利厚生費	779,535	811,723	△ 32,188	
旅費交通費	892,518	3,315,332	△ 2,422,814	
通信運搬費	1,231,834	557,812	674,022	
減価償却費	92,979	60,497	32,482	
退職手当	594,000	0	594,000	
消耗品費	498,224	857,250	△ 359,026	
印刷製本費	2,657,273	1,000,461	1,656,812	
会議費	114,720	173,000	△ 58,280	
光熱水料費	129,252	146,229	△ 16,977	
賃借料	2,938,612	3,245,514	△ 306,902	
諸謝金	25,000	195,000	△ 170,000	
臨時雇賃金	1,136,000	760,000		
退職手当引当資産繰入	639,000	143,000	496,000	
経常費用計	28,499,859	24,892,655	3,607,204	
評価損益等調整前経常増減額	△ 5,705,118	△ 171,698	△ 5,533,420	
有価証券売却損益	△ 2,856,680	178,000	△ 3,034,680	
基本財産等評価損益	△ 7,406,677	18,435,416	△ 25,842,093	
当期経常増減額	△ 15,968,475	18,441,718	△ 34,410,193	
2 経常外増減の部				
(1) 経常外収益				
貯蔵品資産受入	0	0	0	
資産計上	594,000	170	593,830	
経常外収益計	594,000	170	593,830	
(2) 経常外費用				
特攻像台座	0	0	0	
貯蔵品資産償却	109,000	0	109,000	
経常外費用計	109,000	0	109,000	
当期経常外増減額	485,000	170	484,830	
当期一般正味財産増減額	△ 15,483,475	18,441,888	△ 33,925,363	
一般正味財産期首残高	293,170,349	274,728,461	18,441,888	
一般正味財産期末残高	277,686,874	293,170,349	△ 15,483,475	
II 指定正味財産増減の部				
一般正味財産への振替	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
III 正味財産期末残高	277,686,874	293,170,349	△ 15,483,475	

ナの影響で、役員、会員による勧誘に制約があったため61名と低調であった。一方、退会者は会費未納3年による会員資格喪失が105名と過去2番目の多さで、これと逝去等による退会も併せて、退会者が175名となったため、令和2年度末会員数は昨年度より114名減少し、1359名となった。

会員の減少傾向は、会の年齢構成から見れば今後も厳しい状況が継続するものと思われる。令和3年度は会の魅力化による会員のつなぎ止めに努めるとともに、役員等を中心として、特に若手会員の獲得を重視して募集業務に精励し会勢の挽回を期したい。

寄付者御芳名(敬称略)

(令和3年1月1日～3月31日)

(単位千円)

一〇〇	呉 奈々子	一〇〇	外間 盛善	五	後藤 昭一	五	高山 友二	二	大林 喜一	二	池田佐嘉衛
九〇	山根 秋男	二〇	遠山三千代	五	松田 栄	五	上野むつ子	二	大森 和弘	二	大瀧 成紀
一〇	柿崎 裕治	一〇	吉田 三郎	五	川井 孝輔	五	前田 俊郎	二	石井 敏子	二	早川 文象
一〇	原島 淳子	一〇	今泉 幸男	五	中島 尚史	五	湯澤 一枝	二	正根 恵二	二	水町 博勝
一〇	紺野 真理	一〇	作左部 貢	四	明石 英次	四	岡寄 幸平	二	深山 明敏	二	城ヶ端 専
一〇	石井 令彦	一〇	多田 剛	四	岩成 真一	四	佐藤 義信	二	松尾 知男	二	小林由貴子
一〇	中溝 二郎	一〇	粕井 隆	三	倉田 邦男	三	塚田 征二	二	若月 良介	二	小森 正明
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇		三	天野 弘子	三	宮崎 重忠	二	山本 健雄	二	山脇 智美
一〇	浮世 喜昭	一〇	堀江 正夫	三	小長谷文晴	三	神原 孝	二	降矢 達男	二	高橋 芳幸
一〇	末次 優一	一〇	濱田 秀逸	三	清水 典	三	池田 守	二	三浦 守	二	栗原 巖

八	椿 孝則	七	加藤 拓	三	中村 竹雄	二	市来 徹夫
七	ノブレス株式会社	七	笹富 公夫	二	早瀬 登	二	安藤佐智子
七	今井 敏	七	小池 末人	二	安河内康彦	二	花塚真知子
七	酒見 奎一	七	神林 千祥	二	櫻村 保貞	二	茅野 幸雄
七	小堀桂一郎	七	川岸 義視	二	館本 勳武	二	吉田 治正
七	千葉 孝	七	早田 亮彦	二	宮尾 敏晴	二	橋本 亀
七	川田久四郎	七	中村光太郎	二	近藤 敬子	二	近藤 健
七	大坪万里子	七	渡辺 隆	二	近藤 明雄	二	栗原 巖
七	長岡 暢俊	七	馬場しづ子	二	降矢 達男	二	高橋 芳幸
七	堂坂 清	七	武谷 孝生	二	三浦 守	二	山本 寛
七	東洋物産株式会社	七	平川 善人	二	山本 健雄	二	山脇 智美
七	飯田 隆夫	七	澤田江里子	二	若月 良介	二	小森 正明
七	服部 武志	七	白田 智子	二	小野 好永	二	小林由貴子
七	牧 重勝	七	加藤 千佳	二	松尾 知男	二	城ヶ端 専
七	國武 統士	七	古屋 七郎	二	深山 明敏	二	水町 博勝
七	伊藤 元夫	五	高屋 七郎	二	正根 恵二	二	水町 博勝
七	下森 康玄	五	古屋 七郎	二	石井 敏子	二	早川 文象
七	吉野 信二	五	加藤 千佳	二	大森 和弘	二	大瀧 成紀
五	後藤 昭一	五	高山 友二	二	石井 敏子	二	早川 文象
五	松田 栄	五	上野むつ子	二	正根 恵二	二	水町 博勝
五	川井 孝輔	五	前田 俊郎	二	深山 明敏	二	城ヶ端 専
五	中島 尚史	五	湯澤 一枝	二	松尾 知男	二	小林由貴子
五	明石 英次	四	岡寄 幸平	二	若月 良介	二	小森 正明
四	岩成 真一	四	佐藤 義信	二	山本 健雄	二	山脇 智美
四	倉田 邦男	三	塚田 征二	二	若月 良介	二	小森 正明
四	天野 弘子	三	宮崎 重忠	二	山本 健雄	二	山脇 智美
三	小長谷文晴	三	神原 孝	二	若月 良介	二	小森 正明
三	清水 典	三	池田 守	二	山本 健雄	二	山脇 智美



新入会員名簿(敬称略)

(令和3年1月1日～3月31日)

一	関 亜沙美	一	江守 聖孝
一	佐多 和仁	一	佐藤 孝二
一	七瀬谷重男	一	小澤美智江
一	松岡 廣城	一	杉山 徹宗
一	青木 義博	一	大手 良之
一	田村 政昭	一	渡辺 由佳
一	渡辺 里佳	一	島野 雅子
一	武藤 一彦	一	福島 隆夫
一	里崎 雪	一	

会員計報(敬称略)

秋田	作左部 貢	(2)
神奈川	小島 勤	(3・2・4)
岐阜	比留間次郎	(3・3・13)
大阪	久世 高義	(2・5)
兵庫	丸 利郎	(2・5・27)
	笠井 智一	(3・1・9)
長崎	中島 忠雄	(1・11・24)
熊本	美作 博	(2・12・3)

ご冥福をお祈りします。

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰(他団体への参加を含む)
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○URL: <https://tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。が必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛として下さい。  
〒102-0072  
東京都千代田区飯田橋一丁目5-7  
東専堂ビル2階  
公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会  
電話 03-52213-4594  
FAX 03-52213-4596  
E-mail jimukyoku@tokkotai.or.jp